



aaca30周年記念事業 景観シンポジウム

ローカリティを魅せるしつらえ

～建築、ランドスケープ、アートの所作～



日時：平成30年10月1日(月) 15:00～17:45

会場：日本大学駿河台校舎1号館 CSTホール

■基調講演

テーマ：美し国の創り方

講師：進士五十八／造園家・福井県立大学長
東京農業大学名誉教授・元学長

■パネルディスカッション

原田麻魚(マウントフジ・アーキテツスタジオ)

平賀達也(ランドスケープ・プラス)

鷺田めるろ(キュレーター)

[モデレーター]

宮城俊作(設計組織プレイスメディア)

主催 一般社団法人日本建築美術工芸協会

後援 (一社)日本建築学会、(公社)日本建築家協会、(公社)日本建築士会連合会、

(一社)日本建築士事務所協会連合会、(一社)日本インテリアプランナー協会、(一社)日本美術家連盟、(公財)日本美術協会

司会(島本) 本日は「aaca 景観シンポジウム」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

私、司会進行を務めます、当協会会員の島本でございます。どうぞよろしくお願いたします。

本日のシンポジウムは、「ローカリティを魅せるしつらえ～建築、ランドスケープ、アートの所作～」と題して、途中休憩を挟みながら2時間45分ほどを予定しています。なお、一部の終了時刻は16時を予定しています。

それでは、講演に先立ち、当協会の会長、岡本より皆さまにご挨拶を申し上げます。

岡本 皆さま、こんにちは。会長を務めております岡本と申します。よろしくお願いたします。

本日は台風一過、大変交通事情が悪い中、大勢の方々にお集まりいただき、ありがとうございます。

当協会は、平成元年に芦原義信先生によって創立され、芦原先生の理念である、建築とアートとが一体となったすばらしい都市景観を築くような提言をしていこうということで、さまざま

な活動をしています。今年で30年を迎えることになり、30周年記念事業としていろいろな講演やシンポジウムを企画しています。景観シンポジウムは当協会の大きな事業の一つですが、毎年2回開催し、その時々ホットなテーマとか、プロジェクトとか、アートに絡むいろいろなテーマを取り上げ、多くの皆さま方にご来場いただいている企画を展開しています。お手元にあるのは前回行いました、野老先生をお招きした「景観シンポジウム」の資料です。後ほどご覧になっていただきたいと思ひます。

今回は30周年記念事業になります。「ローカリティを魅せるしつらえ」ということで、建築、ランドスケープ、アートが一体となったすばらしい景観、環境の構成をいかにローカリティに結び付けるかということテーマとして、先生方からいろいろとお話をいただけるというので大変楽しみにしています。進士先生をはじめ、ご登壇の先生方から興味あるお話が聴けると期待しています。

さらに、当協会の30周年記念事業は、この10月、11月に盛りだくさんの

企画をいろいろ用意しているので、ぜひこの後も皆さま、いろいろな企画にご参加していただけるようお願いする次第です。同時に、当協会に対し、これからもますますご支援を賜りますようお願いして、私の挨拶とさせていただきます。(拍手)

司会 岡本会長、ありがとうございますました。

それでは、ただいまより第一部、基調講演の部を始めたいと思ひます。ご講演をいただきます、進士五十八さまを紹介させていただきます。

進士さまは1944年、京都市にお生まれになり、東京農業大学農学部造園学科をご卒業のち東京農業大学にて教鞭を執られ、1999年から2005年まで東京農業大学第10代学長を務められました。日本造園学会長、日本都市計画学会長など数多くの要職を歴任され、また、紫綬褒章、みどりの学術賞を受賞されるなど、長年にわたり活躍していらっしゃいます。

それでは進士さま、よろしくお願いたします。

■基調講演

「^{うま}美し国の創り方」

造園家・福井県立大学長
東京農業大学名誉教授・元学長
進士五十八氏



皆さん、こんにちは。本会は30年も続いているのだそうで、大変すばらしい。

最初にPRを一つ。私は3年前から福井県立大学の学長を引き受け、福井に住んでおります。もう一つ、その7～8年前から里山里海湖研究所の所長もつとめています。そこにこの9月、建築家の内藤廣さん設計の福井県年縞博物館がオープンしました。「年縞」ってご存じないでしょうね。パープといって水月湖の底に1年にコンマ何ミリずつの泥が積もっていて、パーコードになっています。その厚さが45メートル、なんと7万年の歴史の物差しとなっています。こういう年表をつくりました。これは展示の中身の要約です。回覧しますからお目通しください。ともかく年

代測定の世界標準というのは凄いものなんです。

何が言いたいかというと、福井県は越前と若狭に分かれていて、若狭のほうはお水送りの小浜市とか、古い仏像がたくさんある古刹とかたくさんあります。仏像などは京都とちがって燃えていないものが福井には残っています。その中に五つの湖が集まった三方五湖があります。その真ん中に水月湖がある。周りに四つあるから周りの泥とかが入ってこない。上澄みだけが入るのが水月湖で、それが非常に深い垂直の湖なものですから静かに積もっていきます。水の底には酸素がほとんどない。生物がないということです。ですから、7万年の泥はきれいに積み重なっている。それが年縞です。環境考古学

の安田喜憲さんがこの名前を付けたのだそうですが、私も福井に行くまで分かりませんでした。

実は、私が所長の里山研究所でこの年縞研究も担当しており、私もそれで勉強したのですが、今年代測定の世界標準になっています。これまでの年代測定は、奈良文化財研究所でやっていた木材の年輪でだいたいの年数を出していましたが、これが一番正確だったのですが、何といたって7万年の樹木はありません。それが年縞は正確に1年単位で7万年間の年代を特定できるので、その世界標準になっているのです。その年縞1本々々に当時の花粉が存在し、里山研究所では分析しはじめています。地球気候変動がわかるのです。

私が最初に年縞の話をしたのは「時間の旅：タイムスケープ」の意義を強調したかったからです。「景観」という言葉と「風景」という言葉があります。私は「風景」を使います。お手元に「景観と風景」という私の文章を入れていただいているので、後でお読みください。私は後のパネルディスカッションのコーディネーター宮城先生と同業で、日本造園学会長をつとめました。

私は若いころ、自然景観の研究が中心でした。ここは建築家の皆さんが多い。そういう方々に文句を言う仕事です。昔は厚生省、今は環境省がやっている自然公園法にもとづく「景観審査指針」の基準づくりをやりました。また、後のパネリストの原田さんの、パレリズムなどという調和景観手法の提案といいますが、後ろの斜度と前の建物の屋根の角度がそろっていれば風景として調和するという、建物と周り



年縞博物館

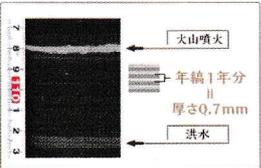
VARVE MUSEUM

水月湖年縞の世界へようこそ!

年縞とは、プランクトンや鉄分など、季節によって異なるものが湖の底に毎年積もること、縞(シマ)模様になった泥の地層です。

水月湖の年縞は世界一の長さ45m、7万年間、毎年連続することなく積み重ねられています。

年縞には湖の周辺の花粉、飛来した火山灰や黄砂、洪水の土砂も含まれています。



世界標準の年代のものさし

考古遺物などの年代をはかる放射性炭素年代測定法の精度を飛躍的に向上させました。

環境のタイムマシン

年縞に含まれる花粉の種類や量、火山灰などから、当時の気温や降水量、火山活動がわかります。



の環境との関係性。そういう提案をしたり、集団施設地区とって、ホテルが並んでいるところが国立公園の中にありますが、その看板の寸法や色彩を決めたりして、上高地や尾瀬ヶ原の収容力の計算やマイカー規制の基礎研究もしました。

そんなことをやりながら、だんだん都市の緑や景観デザインをやってきました。景観という言葉は当時はほとんど使いませんでした。私が最初に行政的なお手伝いをしたのは世田谷区の「都市美委員会」でした。都市計画家の川上秀光先生が座長をやり、私はそこに一番若い委員、造園家として参加しました。ここには建築家の神谷宏治氏、小沢明氏ら、美術評論家の東野芳明氏、まちづくりコーディネーターの林泰義氏ら、いろいろな専門家がおられました。つくづくそのとき、プロフェッションによりものの見方がこんなに違うのかということを感じました。

そのとき、だいたい造園家とかランドスケープをやっているのはマイナーで、メジャーで大きな流れは建築家が主導するという構図でした。今はもう角が取れて優しくなりましたが、若いころは少々かみついていて、横浜国大の三沢浩先生などは講演のとき「建築家に文句を言う先生です」と私を紹介されました。しかし、柴又の寅さんミュージアムと柴又公園の委員会などに誘ってくれて、ランドスケープの大切さはわかってくれました。ランドスケープ・アーキテクトとアーキテクトの大きな違いは、「時間感覚」だと思います。

今「年縞」の7万年のパンフを回しました。内藤廣さんの建築はすばらしい建築です。全部、県内産木材でやっていただきました。残念ながら雪、荷重の関係で鉄骨が一部使われてしまいました。私としては、真っ直ぐ45メートルの長さを歩かせて、7万年の時間の重みを実際に見せ、実感させるのはなかなか壮観であり、時間の中でのものを考えること、時の旅の大切さを伝えるミュージアムは他に無いし、福井のお宝・年縞と恐竜の発信にはかなり有効ではないかと思っています。私はいろいろなことをやってきましたし、たく

さん本も書いたほうですが、中公新書で『日本の庭園』という本を書いています。一番印税をもらった本です。

庭園の美学を語るとき、外国人には「わび」「さび」が通じません。私が今日お話ししたいのは「時間感覚」で時間の美です。たとえばわび・さびの「然(さ)び」です。たとえば鞍馬石という花崗岩の中に入っている鉄分が長時間たつと表面に出て空気とふれて、酸化鉄になります。銅は緑青、酸化銅になる。鉄はさらに酸化すると三二とか四二とかになり、弁柄色の酸化第二鉄の赤さびが黒さびに変わります。如何にも何百年もの風雪に耐えて渋味のある濃茶色の表面の味が、茶人に愛されたのです。端的にいえば、「さび」とは錆びが出るまでにかかる長い時間が醸し出す「時間の美」だと私は捉えています。

美学の人は「わび」「さび」「しおり」を非常に難しく言います。「わび」「さび」「しおり」は、非常に深い日本人の精神史として議論します。だから外国人にはわかりにくい。簡単にこれは「時間の美」であると言えば、空間の美に対して時間美・エイジングの美を日本人は重んじているということが伝わる。そういうことだと思います。錆びるには永い時間が必要です。普通、錆びるとは劣化することでエンジニアや建築家から言えばマイナスイメージでしょう。しかし、私から言うと時間が経てば劣化し錆びるのは自然の本質だと思います。時間とともに年をとるのが本物の自然というものです。そのように考えると、人工物を扱う建築家の皆さんと、自然に基本を置く造園家とはかなり違うと思います。

今やっと「時間を考える時代」に入ってきたと思います。高度成長期はスクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきました。成長の時代でした。これからは熟成、「成熟の時代」だと考えなければいけない。そういうように、歴史・時間概念をこそ大事にしたいと思っています。私が「景観」と「風景」はちがうというのは、景観は一瞬ですが、風景は長い時間でできていくということを言いたいからです。

「美し国の創り方」の背景

もう一つのコピーで「美し国の創り方」を入れています。これはJTB総合研究所編の「旅と生活の未来地図と題する研究年報・2018」で、この正月に書いたものです。今年の冬の福井は37年ぶりの豪雪でした。私はいま永平寺と付き合っています。永平寺では正月早々に会合があります。正月2日の朝7時半にお寺につきました。曹洞宗管長・永平寺貫首の福山諦法禪師のご挨拶がある。ぜひどうぞと言われ、何事も体験だと思ひまして参上しました。

雪をどう捉えるか。雪は毎年、降ります。私はそれは資源だと思います。「美し国の創り方」の冒頭にはそのための提案を入れています。私は以前、東京農大の学長をしていました。農大は網走にもキャンパスがあります。オホーツクキャンパスといひます。ここにタイのチュラポーン王女が何度かご来学されました。それは雪に憧れておいでだったからです。雪は南方の方々には観光資源となる。それで多少気楽なアイデアを書きました。

ところで今日は「美し国の創り方」というタイトルを付けました。たまたま私が「美し国づくり協会」というNPOの理事長を15年やっております。契機は国交省の最初の技術系の事務次官だった青山俊樹さんが「美し(うまし)」という言葉にこだわったことからです。2003に「美しい国づくり政策大綱」をつくり、2004年に「景観法」という法律をつくりました。それ以前に日本中の自治体は自主条例で景観条例をつくってきました。時には風景条例と「風景」を使ったものもあります。風景条例系はたいてい私がお手伝いをしたものです。「景観」と「風景」の違いは後ほど議論したいと思っています。

新しい国土交通省にはいろいろな技術屋が集まります。たとえ同じ土木系でもいろいろ別の思想で仕事をしています。運輸省系は鉄道土木や港湾土木です。建設省系では河川土木や道路土木です。国土庁にも計画系がいます。同じ技術屋だけど、各省庁からカルチュアの違う技術屋が集まって国交省ができた。技術屋はそれぞれ有能ですが、

異文化が会おうとカルチャーショックやトラブルが起こってしまう。思想にズレがあるからです。それで青山俊樹事務次官が考えたのが「美しい国をつくろう」という共通目標を示すことで統調することだった。

安倍総理大臣は「美しい国」を本にしました。おかげで「美しい国」が有名になりましたが、国家が美しい国づくりを言うのは実は初めてです。都市計画法が大正8年にできますが、そのころ美しい都市をつくろうという議論は議事には残っていますが、当時の財政は「美しい国なんて言ったら、どれだけお金がかかるか分からん」といって抹殺しました。日本の国は美しい国をつくるという政策を、これまで行政的には持ってこなかったのです。

芦原義信先生の『街並みの美学』が嚆矢で、一般の皆さんにも美しいまちをつくろうという議論が起こってきたのですが、地方自治体レベルでは条例化されたが、国レベルでは2004年の「景観法」までありませんでした。芦原先生の「美しい」はヨーロッパ的な普遍性をもったものでしたが、果たしてアジアモンスーンの日本の美しさとして、それでいいのかは私たちには疑問で「美し(うまし)」と大和言葉を大事にしようというふうに考えました。前にお話した「然び(さび)」の美論では、高温多湿の日本だからこそ、鉄は錆び銅は錆びるし緑青をふく。岩は苔むしてゆく。

そんなことをお話ししようと今日いただいた演題「ローカルリティを魅せるしつらえ」にくっつけてパワポをつくりました。

ランドスケープと「生活多様性」

最初に私の原則論を二つお話ししようと思います。

たまたま2010年愛知県で国連の生物多様性条約の締約国会議がありました。COP10です。そのとき私は環境省が世界にアピールする「SATOYAMAイニシアティブ」の日本政府方針を作成する委員長をつとめました。バイオダイバーシティのために、日本の里地・里山の保全と利活用においては自然と人間の関係性が大変美事であったとい

うことを世界にアピールしようということでした。そのとき私個人が感じたのは、自然環境の持続性のために「生物多様性」は大変重要だがそれだけをやっていいいいのか。現実には過密都市も、景観の乱れた国土や災害の状況も、あちこち大変な状態です。

半世紀以上も前ですが、私は日本の地図をトレースしたことがあります。自然海岸のところだけを実線で墨入れしてみると、日本地図はもうボロボロです。実線にして自然海岸を描き、半人工海岸を破線でかいてみたのですが、日本の国土は体を成さない。ほとんどはコンクリートで人工化してしまったのです。結局、自然環境のためにバイオダイバーシティを実践してもだめで経済や社会の持続性も一緒に考えないとだめです。研究者は自然系と人工系と分けてしまう。さらに細分化していて、全体を見る人はいません。われわれランドスケープ屋のモットーはトータル・ランドスケープ、全体景観です。端から端まで全部を見る。それがスケープということです。

そう考えると、われわれは自然環境を持続させても人間社会が減びてはしょうがない。私の考えでは「社会的環境」の持続性のためには「生活多様性」即ち、ライフスタイル・ダイバーシティが不可欠。これまでのように一つの価値観で生きることが本当にいいのかと

いうことです。いろいろな生き方があっていいのではないか。私はランドスケープ屋として『グリーン・エコライフ』を小学館で出しました。六本木ヒルズのタワー住民のようにアーバンライフをエンジョイしつつも、野菜や花など多彩な自然と付き合いながら暮らす生き方もあっていい。都心でおしゃれな暮らしを楽しむのもいい。しかし一方で、田舎暮らしも肯定しよう。そういう発想です。多様な生き方を全面的に肯定する。

次に、経済もそうです。NHKの皆さんの努力と藻谷浩介さんの『里山資本主義』が一般化してきました。それが出た後、『路地裏資本主義』とか、今本屋にはなんとか資本主義がいろいろと並んでいます。これも経済の在り方がマネー資本主義、つまり、オイルダラーや世界の金融を動かす経済システムだけでいいのかという疑問がやっとなってきたということです。市民やNPOが里山保全をしていますが、もともと里山はローカルで小さな経済の営みでもあったのです。そういうことをちゃんと肯定しよう。「経済多様性」エコノミー・ダイバーシティです。今市民活動の中で盛んに行われている地域通貨なども大変結構なことだと思っています。

それらが合わさるとどうなるか。大地の自然と人々のくらしとエコノミーの

進士：風景デザイン論1999

美しい景観からいい風景へ：景観十年・風景百年・風土千年



Landscape Design→Design with Nature→
Natural Material→Agingの美。(日本の美:さび)

『風景デザイン』(進士・森・原・浦口 1999)

- I. 景観論→視覚的環境
- II. 風景論→記憶、思い出、原風景、集団表象
- III. 風景デザイン論→主体・参加、保全・建設・創造

全体性→個のデザインから群のデザインへ
(家、家並み、街並み、水の辺、山の辺、山並み)

トータルランドスケープ・アメニティへ

あり方が多様になると結局は、眼前の風景が多様になるのです。人間活動のスタイルが文化であり、その結果が形に現れたのが風景です。

人間の営みが固有の作法に安定したのが文化です。文化(culture)は語源の耕し方に由来します。その土地が、例えば粘土であったら田んぼになります。さらさらの土、壤土といいますが、畑になります。砂地になると、ゴボウなど根菜にはいい。そのように自然環境は、少し違うと違うものがとれるわけです。cultureはcultivate、耕し方です。耕し方は場所によりみんな違います。その土地や集団固有のスタイルが文化です。役人には役人文化があり、建築家には建築家文化があり、アーティストにはアーティストらしいカルチャー、作法がある。

今日私が言いたいテーマは、文化的環境の持続性がランドスケープ・ダイバーシティにあるということです。新しい時代の都市の在り方はまた別に議論すべきでしょう。それもだいぶ変わってきたように思います。たまたまこの夏、中国での講演会を頼まれました。北京の北、河北省に首都機能を果たす新しい都市づくりをすすめていて、その在り方を議論するセミナーでした。雄安特区という習主席のプロジェクトです。造園と都市計画の専門家として呼ばれました。それまでの中国のシンポジウムでは欧米人のゲストが多かったのですが、今回は中国人のほか私だけが呼ばれました。テーマは「東方のデザイン」というもので超高層を否定したアジア型エコシティが目標です。今日のパネルではそういう議論も行われるでしょうから楽しみです。もちろん私はランドスケープ・ダイバーシティをつくっていかないとダメだと思います。小泉さんが観光立国を宣言しました。直接はインバウンドですが、当然、国内観光でも同じです。人が移動するのは、日常と違う景観を楽しみたいからです。そして違う文化、その土地の人たちとのコミュニケーションを楽しむために移動するわけです。そういう意味で観光上もランドスケープ・ダイバーシティが最も重要だろうと思います。

もう一つが、今日のテーマである風景論です。99年に私は、世田谷区でアーバンデザインをやっていた原さん、「よこはまかわを考える会」をやっていた森さん、景観コンサルの浦口さんと『風景デザイン』(学芸出版社)という本を出しました(1)。書名とサブタイトルも私がつくったのですが、サブは「感性とボランディアのまちづくり」です。

そのときに21世紀という時代はどんな世紀にすべきかと考えたのです。専門家というのは専門には強いが、それ以外はだめだということでもあります。つまりある分野の知、インテリジェンスだけでものを考えそれを一般化してしまう悪いくせがある。反対側の感性のほうを忘れてしまっているのです。感じる力がなくてどうするのだと私などは思います。

皆さんの会はまさにそこを狙い、建築だけではなく美術や工芸の皆さんとも一緒に、それこそトータルな美のある世界をつくろうとされているのだらうと思います。そういう意味で「五感六感の総合的感性」というものを基本に置かないとダメです。づくり手のみならず受け手も当然です。

もう一つ、「ボランディアのまちづくり」とサブタイトルに入れたのは主体的に生きる時代であるべきだということ です。表紙は私の下の娘に描かせたイラストです。世の中は老若男女、いろいろな人間性、顔のひとがいるということ。人間多様性を前提にしない社会はだめだと考えました。

芦原先生とは私も若いころ、幾つかの審査会でご一緒しました。こんなに温厚な先生がいるのだと、お人柄に本当にほれ込んでいました。ただ、一つ異議があったのは、『街並みの美学』で、日比谷公園はけしからん、緑で囲っているのはいけないと書いておられ代替案のイラストまでついていました。

造園家としては、はっきり言わせていただきます。駒沢オリンピック記念公園の広場は芦原先生の設計です。都電の敷石を上手に使い、五重塔形式のランドマークを建てて景観効果を上げている。私から言うと、日比谷公園のほうは大勢の利用者がいますが、駒沢公

園は場所柄もあってでしょうけど、人はあまりいません。だいたい石の広場は格好いいが、夏は暑くて冬は寒くてたまりません。言い方が失礼ですが、美の空間だけを考えるのか、ユーザー(人間)の心地よさを考えるかということです。

統一美を追求するウェスタンスタイルの美意識がいいのか。東アジアの界限性や人間味も忘れないことが大切かと思います。ランドスケープデザインでは「Design with nature」と「Park for People」が基本ですし、前にもお話ししたように自然材料第一を考えると時間美の問題につながってくる。年をとる材料で時間とともに成熟する風景をつくりたい。こう思ったのが「風景デザイン論」の私の骨子でした。

私の章は三つに分けました。①「景観論」で視覚的現象として捉えます。②「風景論」は人間の記憶や思い出、原風景。司馬遼太郎に『空海の風景』がありますし、原風景もたくさん言われます。奥野健男さんですね。そこではみんな「風景」を使う。「原景観」と言ってもおかしくないのですが、やはり「風景」の方がトータルです。人間にとっての景観です。景観論は目でしょうが、心を問題にすると「風景」を使いたいと思います。一般論としては配付資料のとおりで、科学的、公平、客観的なのが「景観」という言葉。人間の思いや意識が入って文学的なのが「風景」という言葉。

もう一つ③「風景デザイン論」。風景はつくられるべきだということです。「風景」というと、だいたい守る話ばかり考えてしまう。そうではないと言いたかったのです。一戸の家から、家並み、街並み、水辺、山辺、山並みへとずっと広がっていきます。これがランドスケープだと思います。それをトータルなランドスケープへと仕上げ、その環境質アメニティを目指そうというわけです。

ここからは二、三景観の話を考えます。迎賓館の前の木が倒れていると、今日の朝、ニュースでやっていました。ああいうのを見ると、直感的に木とか自然は困ったものだと皆さん思っ

う。しかし、日本中の樹木の数と、ニュースになるような、木がひっくり返って災いしてみんな迷惑だというものの比を考えてみてください。圧倒的に建築物など人工物のほうが危険率が高いのです。そんな見方も皆さんには申し上げておきたいと思います。

私は今日街並みを歩きながらウォッチングしました。相当風が強い。庭の柿もだいぶ落ちていました。しかし、まだたくさんあったまです。柳に風ではないですが、植物はあれだけの風にも耐えられるようにできています。まさしく柔らかい。自然をばかにしてはいけません。もう少し言うと、「レジリエンス」などという言葉をつかわなくてもいいので、ランドスケープアーキテクチュアの心を大事にすればいい。ランドスケープの概念には、レジリエンスの考え方は既に内包していると思います。

たとえば安定感について。垂直に対し水平ということです。ビッグサイトは立派な作品で視認性は高いのですが、逆三角でひっくり返ってきそうなイメージでみんな注目する。だから有名になるわけです。黄色いビルも同じです。こういうふうには安定景観を逆手にとると有名建築になります。ただ、巨大な高層が林立すると生物の人間にはきついなということを、そろそろお感じになられてもよいのではないのでしょうか。

景観のポイントは関係性が原則です。どこにあるか土地柄、場所柄が最も大事であり、この形、この色ならどこでも景観にいいというものはありません。プロダクトデザインの皆さんはものだけにフォーカスしてデザインする。色彩でも同じです。赤い色を塗ってはいけないと思っている単純な市民が多い。しかし、阿蘇の緑の深い渓谷に大野美代子さんが設計した橋がある。ああいう場所ではきれいな真っ赤を塗ったほうがいい。圧倒的な大自然の中では、原色でもむしろ効果的な場合があるのです。単純に、赤はいけない、逆三角形はいけないという言い方は、本当はまずいと私は思います。その場所に合うかどうかで判断すべきです。そうすると、単純です。土地との関係、点景と背景の関係で考えればい

いのです。

ただ、問題は商業主義です。湘南海岸にログハウスの喫茶店やレストランができました。エコロジーとか自然とマスコミが表面的なファッションで言いすぎるので、それに乗って大勢の人が来るからです。そして、湿っぽい潮風の海岸線にログハウス。ローカリティが大切という点と民家風がいいと思ってしまいます。ほとんどの飲み屋チェーンはみんなフェイクの民芸調です。困ったものです。

調和景観の基本原則のひとつに多様性と統一性があります。多様性が過ぎると混乱になり、統一が過ぎると退屈になります。自衛隊員の迷彩服を見れば分かるように、個性はないわけです。ああいう風景は退屈。ほどほどの多様性と統一性のダイナミックバランスが必要です。一番わかり易いのは、先ほど緑のことを言いましたが、「緑は百難かくす」で、どんな風景でも緑で包めば、落ち着いた風景になることは間違いありません。

それから、私は『ルール・ランドスケープ・デザインの手法』（学芸出版社）を出しています。この本はアーバンデザインに対しての、オルタナティブのつもりでした。私は横浜市の委員を長いことやりました。国吉さんがいますが、田村明先生とも自治体学会でお付き合いしてきました。そこで思ったのは、ローコストの公共事業に工業製品を多用するのはやむを得ないのだろう。インターロッキングで舗装スタイルを張る。工業製品ですから大量生産・大量流通、日本中同じ文明的風景になってしまいます。だからせめて街路樹に郷土の樹木をつかうか、自然風植栽にするかしないといけない。土地利用計画上、斜面林を活用するか都市農地を残すか。アーバンデザインではどうしても工業系デザインになってしまいます。

「ルール」は「田舎の」です。今日のテーマのローカリティとはそういうことです。田舎の人は、都会に差別されていると思っています。マスコミは今グローバルイズムの中で、グローカルを言い出した。

私が本気で言いたいのは「百姓のデザイン」の現代的意義です。百姓とは

何か。たくさんの能力を持っていないとできない仕事です。あるいは、たくさんの能力を発揮できる仕事だと私は思っています。

自然と大地のこと。どこが崩れ易いか、洪水がどこへ出るか。土の良し悪し。肥料分があるかどうか、排水がいかどうか。農作物は温度、湿度、雨量、あるいは日照で左右されるからです。それは、どこでも同じ知識では足りないのです。私は農大の学長としてマネジメントにつきあってつくづく、農学部は大変だと思いました。だって寒冷地農場、温帯の農場、亜熱帯農場。それでも足りなくて台湾の農場にまで実習に行きます。施設と人件費が結構かかります。意外と大変です。でも自然とはそういうものです。

しかし一方でこのルール、百姓のデザインのおもしろさや本質を突き詰めると、ローカリティの魅力を直ぐに回復できます。GHQが日本に宗教法人法をつくってしまい、結果的に氏神や菩提寺の社叢をだめにしてしまいました。今では幼稚園、パーキング。元来、鎮守の森や社叢はコモンスペース、日本型公園の原型だと思います。お寺や神社の境内地は日本の歴史的緑地。まさにパブリックなものです。コモン、みんなのスペースだったのです。それが宗教法人法になって5～6人の宗教法人の理事が改廃を決められる。東京の神社はほとんどマンション経営をしている。神社の本体を残しているならまだいいが、屋上に上げてしまったりしている。

もちろん神社の意味をわかっている事業者もいる。日本橋の室町の再開発で三井不動産が福德神社を再建して評判になっています。私は10年ぐらい前に韓国のニュータウンに行きました。土地利用計画に「宗教施設区」がちゃんとゾーニングされていました。都市生活でも宗教はとても大事だという考え方です。

農村社会はそういう氏神や菩提寺でできています。それはコミュニティのコアでもありました。地方創生が本当に必要だと私は思っており、福井県の知事から頼まれましたので県立里山里海

湖研究所長をお引受けし、時々現場に行ってみて地方の厳しさを見ています。地方ではイノシヤサルも多く、自家用の野菜をつくる農家の前庭でも周りだけ囲ってもだめで、上部までネットで囲わないといけない。上にもネットを張るんですよ。サルが上から飛び込んでしまうからです。人口密度よりも野生鳥獣の密度が高い。こんなことで国土保全ができるだろうかと思えます。ルーラル・ランドスケープをお忘れなく。これからはアーバンだけでは足りない。「農」とか「田舎」、「地方」とかを視野に入れませんか、日本の国土の持続性は不可能です。

最後に「景観」を考える。ものを見るとき視点の二つほどお話ししたいと思います。

まず、歩き方です。歩行速度は非常に重要だと思います。イギリスにはランブラス協会というのがあります。イギリスの国土の自然や田園を愛するためにみんなが歩けるようにしたいとする団体があります。今私が住んでいる福井県では1戸に4台、5台の車が止まっていて、歩いているひとはほとんどいません。日本の地方は、歩かない時代になってしまいました。これは日本人の健康における大問題だと思います。歩くことは人間の基本だということを忘れてはならない。レジャーウォークと言いますが、そぞろ歩きで町を歩けばなお楽しい。

私は若いころ、井の頭公園で歩行速度の調査をしました。池のほとりの美しい風景のところは本当にゆっくりゆっくりです。0.8メートル/秒どころではない。もっとゆっくりでした。手をつないだ二人であれば、さらにゆっくりになります。レジャーウォークだと周りの環境を味わえるのです。レジャーウォークで歩く街です。朝のラッシュ時、東京駅のサラリーマンの風景はだいたい小走りです。気の毒にほとんど小走りです。

景観は歩き方で見え方が変わります。情報量も変わります。自動車ですと200メートル走る。次に自転車です。次に歩く。それぞれそのとき印象に残ったものを全部書き出せという実

験をやったことがあります。情報量が全く違います。高速化は文明の生き方ですが、それをひっくり返す文化的生き方をわれわれは持たないといけないと思います。

もう一つ別の視点、李白の詩に「静夜思」があります。「牀前看月光(しょうぜん げっこうをみる) / 疑是地上霜(うたごうらくは これちじょうのしもか) / 挙頭望山月(こうべをあげては さんげつをのぞみ) / 低頭思故郷(こうべをたれては こきょうをおもう)」。首の振り方と景観の見え方です。「こうべをあげては さんげつをのぞみ」。山の端に月が昇ります。銀閣寺の山には月待山という名前が付いている。山の端に月は風景論の基本です。ベッドから外の月を見ると、月の光りで地上に霜が降りたように見えます。次に頭を垂れたら実際には床が見えるはずでしょう。

もちろん床が見えるようでは詩になりませんが、本当は床が見える。でもそれが、故郷を思うことになる。つまり、心の内面に入ります。西郷さんの銅像があんなに高くて見上げるように造ってあるのもそうです。われわれ人間の動作で、お能を舞うとき面(おもて)を下げたり上向きにしたりで泣いたり笑ったりするのもそうです。

見る側そのものの体の動きで景観は変わります。今、そういうことをすっかり忘れていました。この身体の動きと景観の見え方までを考えてデザインしたいものだと思います。

次は心のもち方までを含めた「風景論」についてです。私が重視してきたのは原風景論でした。これまでに個々の学生たちに自分の原風景を思い出して考えさせてきました。絵に描いてもいいし、文章にしてもいい。奥野健男さんは「文学における原風景」だったので、私はランドスケープデザイナーにおける原風景と作品の特色の関係性を分析してきました。宮城先生の原風景と作品も含めて『進士五十八と22人のランドスケープ・アーキテクト』(マルモ出版)の本を出しています。原風景が豊かだと立派なデザイナーが生まれる。面白い作品が生まれる。そう



いうことを考えると、今一瞬目の前に視覚原理だけでどういう形をつくるか、どういう色を塗るかというようなレベルの話ではない。もっと深いものが「風景論の基本」になればいけないと思います。

もう一つは人類の歴史と景観のことです。これは中村良夫先生が「集団表象」と言っておられます。たとえば理想世界を各民族が描いています。エルドラド、ミレニウム、アルカディア、東洋では桃源郷、極楽浄土、蓬莱島など、その集団固有の共通イメージをもってきます。理想的景観像といってもよい。私もこれに全く同感です。前に紹介した雄安特区の講演のテーマは「東方の環境デザイン」。西方ではなく東方です。習近平さんは中華意識をもってか、中国らしい都市計画をやる、広大な蓮の花が広がる湖水を保全したり、低層で水平の町並みをつくり、高層ビルはつukらないエコシティ方針を出しています。高さ制限もかけていました。どんどん地価が上がってきたので土地取引を停止させたそうです。風景デザインとは、その土地らしさの具現化でなければならない。それぞれの自然風土・歴史的風土での景観デザインであるべきなのです。

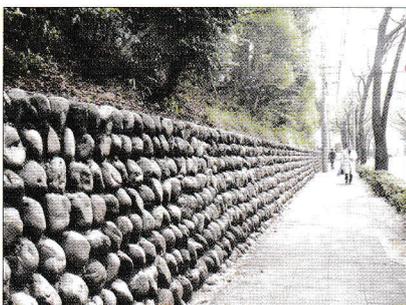
さてもう一つ大切なこと、それは、風景づくりのねらいはトータル・ランドスケープの創造ということです。地質・地形・植性・水理・動物・地理的要因の総合されたものが「風景」だということです。私は風景の解剖と言っています。

広島では土砂崩れ事故が起こる。御影石の砂、真土だからです。花こう岩地質は植物にとって不都合です。固まるとコチンコチンになるし、水が入るとドロドロになる、本当に厄介です。

あんな土地条件の場所で宅地開発許可はおかしい。避けるべきでした。工学系の技術者に、そういう意味で Design with Nature の精神がなさすぎます。地質がらみの風景として白砂青松があります。松ぐらしか育たない貧栄養性の真土の海岸美を「白砂青松」と朝鮮通信使が詠んだわけです。以下具体的説明は省略しますが、地形、地質、植生や水系の違いで、風景はいろいろ違ってきます。地形や植生など要因が同じ場所一つもありません。ですから、風景は元来地域独自性を持っているわけです。

ウィリアム・ホルフォード卿という貴族の「アメニティ」の定義は「The right thing in the right place」です。「然るべきものが「然る」べきところにある状態がアメニティだと言います。ちなみに、Amenity の語源は Amare (愛)。あるいは、ラテン語の Amoenitas (アモニエタス) です。そのしかるべき場所とはどういうことかという、地質・地形・植生などで特色づけられる場所性です。固有性をそれぞれ持っているわけです。それぞれがローカリティを醸し出しているわけです。

冒頭でも申し上げましたが、もう一つ言いたいことが時間(時の重み、Time-scape)の意義です。景観という言葉は、もともと植物学者の三好学先生がつくった地理学用語で Landschaft (独) の翻訳語ですが、造園学では専ら「風景計画」とか、「風景地計画」とか、「風景論」とか、「風景」を使ってきました。土木の竹林征三さんが「景観十年・風景百年・風土千年」と書きました。これは「樹木十年・樹林百年」というように中国での用例の一つで、「時間の重要性」を言っています。



2

この説明に、私は「美人」と「いい女」は違うという言い方で言っています(笑)。「美人」は姿形、ビジュアルがいいということです。「いい女」はビジュアルよりも、長年にわたるいろいろな経験、体験、教養、思索など時間的積み重ねの価値です。それらがトータルに表出されて「いい女」になる。

ですから、私は「美しい景観」より「いい風景」をつくるべきだと言っています。それは賞味期限が長いということです。今の会社の社長は任期が5年とか10年でしょう。100年企業とか老舗業界もありますが、あまりにサラリーマン社長はみな短期決戦です。じっくり時間をかけて育てること、木が育つには長い時間がかかる。成熟に価値をおく風景論が重要だと思います。建築においては時間や歴史の価値が十分に熟成するような材料や意匠を大切にしてほしいものです。

前にもお話ししたように、私は日本庭園の美ということで、「わび」「さび」があり、その「わび」「さび」をどうやって外国人にも解らせるか。そこで、河野さんという美学者の「然びとは時間の経過によってそのものの本質が表面に現れること」をヒントに、「Aging の美」という論文を発表しました。私の解釈だと、木の生命力は根張りに顕われ、それが強ければ倒れないし、樹木の安定感と美ができる。安定した姿が、自然そっくり(然り)に通じるのです。

東京デザインランドが浦安につくられたとき、私の教え子たちがあのチームに何人かいて裏側を見せてくれました。たまたまマニュアルを見せてもらったら、「エイジングの美」とはもちろん書いていないが、「エイジングテクニク」とか何とかあった。新しくつくるディ



3

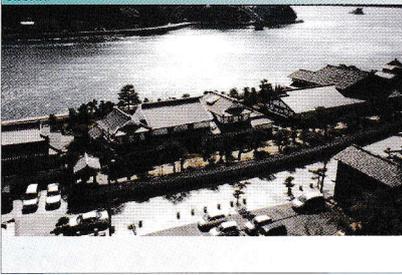
ズニランドの施設だけでも、古い城とか教会とかカウボーイの家だとかの壁に釘が打ってあるようにペイントで描いてある。それをよりリアルに見せるのに釘の錆びが垂れているようにペインティングで演出するのです。それをエイジングの何となくと呼ぶらしい。私は「これだ」と思いました。歳を取るとするのはふつう劣化と考えます。高齢化社会はエイジングソサエティという。でも、歳をとっていくと知識も経験も高まり、知的には美しい。美しく老いるともよく言います。

もう一つ、イギリス人たちが使っているのは「weathered の味合い」ということです。雨が降り、風が吹いてさらされれば、白木がだんだんグレーに変わっていく。これが大事な味合い、風合いだと言います。「天候変化や時間の美」の表現です。時間とともに美しく変化、変質する材料をつかえばいい味が出てくる。夢でも見てはいけないうのはプラスチックの外部空間での利用です。

プラスチックは必ず劣化します。私は若かりし頃呉羽化学の東京研究所にいて、プラスチックの物性をやってみました。可塑剤は太陽光に弱いんです。私は若いころやった仕事の逆ベクトルで、今の人生を生きてるわけです(笑)。給料も最高によかったけど、実験中に目をやられましたが、いい会社でした。プラスチック製品はどうしても褪色してしまうわけです。何年かできれいな色が必ずだめになる。自然材は逆に味が出てだんだんよくなるということをデザイナーは大事にしてほしいのです。

次は「八景式風景観」についてです。これも私の発明です。日本では近江八景が琵琶湖の南にあります。最初に奈良八景、次に近江八景ができ、その後日本各地に詠まれるようになり全国各地へ行っても八景はあります。それはみんな中国の瀟湘八景のまねです。「八景」は4文字の八句でできていて、上の2文字は地名や場所名で、下の2文字は情景をあらわしていますが、中・日どこの八景もほとんど情景は共通しています。上の2文字にはお寺があるとお寺の名前、たとえば「三井の」「称

ガーデン・アイランド下蒲刈島——移築建築などによるイメージ復元の朝鮮通信使資料館



4

ガーデン・アイランド下蒲刈島——他の島との借景技法による共鳴、多孔質ピオトープ、地場材の花崗岩を多用した防波堤



5

名の」となる。「○○晩鐘」とありますのは、横浜の金沢には北条氏がつくった称名寺で「称名の晩鐘」があります。琵琶湖のほとりに三井寺がありますから「三井の晩鐘」となるわけです。中国の場合は「煙寺の晩鐘」です。これはサウンドスケープ、音の風景です。八景がよくできているのは、場所が寺院であったり水辺だったり山だったり、多様性に富んでいて、自然の土地のいろいろな顔、これを全部味わおうということです。

下2文字の情景では、朝夕の変化、四季の変化の時間と季節、動植物から人事までを詠んでいる。例えば「帰帆」は、夜、船が帰ってくる。漁師が漁をして船で帰ってくるわけです。つまり漁師の生業、営みまでも思いやるわけです。これまでの風景論では、日本百景など非日常の観光風景ばかりをとりあげてきて、日常的な「生活風景」を無視してきたのです。それが志賀重昂以来、日本の風景論の常識でした。

私はかつて世田谷区の都市美委員会で「せたがや百景」を提案し、日本初の『生活風景論』を展開しました。生活風景をもっと大事にしないと日本中定型になってしまうからです。少なくとも場所のすばらしさ、土地のすばらしさ、そして時間や季節によっての変化する情景。これに人々の生活風景が入るとその地域の生活文化的魅力が浮き上がっ

ガーデン・アイランド下蒲刈島——大橋からの島の入口：白崎園（造園家伊藤邦衛の制作）



6

てくる。風景のトータリティが「八景式風景観」というものだと思います。

最後に「風景デザイン論」です。中国の杭州が平泉と同じ時に世界文化遺産になりました。800年ほどかけて、南宋の都臨安（今の杭州市）の西にある湖水は名勝地に変貌してゆきました。そのベストポイントを「西湖十景」といいます。ここでは白楽天、蘇東坡のような詩人が地方長官として赴任し風景づくりをリードしました。その契機が洪水防止対策にあったことに私は注目しました。杭州の街。つまり、宋の時代の臨安には城壁がありましたから、西湖は郊外リゾートのようでした。湖の周りは三方が山で囲まれている。だいたい中国では、山の木は伐るのですが植えません。植えないで切るばかりだから、雨が降ると山からすぐ泥が入る。今でも2メートルぐらいの浅い湖ですから、すぐ水かさ上がる。あふれると杭州市街は洪水になるから必ずその対策が必要になる。泥を浚渫して、それを始末しなければいけない。

この湖の左側にあるのは蘇東坡がつくった蘇堤と言い、たった1年で完成した堤防です。この風景が人気で西湖十景図画集は日本のインテリアに愛され、やがて日本の大名庭園に再現されます。小石川の後樂園にも中国の「西湖堤」とかがあります。旧芝離宮にもあります。紀州和歌浦の養翠園にも、

広島縮景園にも西湖堤やアーチ橋があります。浚渫した泥を土手状に集め、バイパス堤をつくったわけです。それが白堤とか蘇堤です。洪水対策から交通対策、内水面漁業対策はアーチ橋によります。西湖堤には必ず石のアーチ橋があります。広島縮景園の石橋がカレンダーになってますでしょう。いかにも中国らしい。堤には楊柳を植えました。柳の下には桃を植えました。桃の花がきれいです。「柳は緑、花は紅」という禅語は、ここから来たものです。

ちょうど今ごろ、秋の西湖畔は金木犀のいい香りです。スメルスケープ、においの風景といつてもいい。視覚のみならず、音の風景からいって五感全部を味わうようになっています。周りの山並みには保淑塔というランドマークも立てられ山の美しさを引き立てています。山並みと湖面のコントラストも効いているわけです。自然の風景では目を引き付けるランドマーク、人間の視野にはアイストップがないと落ち着かないものです。そういうことまで考え、詩人の詩心と絵心で風景が出来てきました。

彼らが詩や絵になるような洪水対策、さらには風景づくりを考えたことに注目すべきです。皆さんの会はその点をねらっているのだと思います。建築も美術も工芸も一つになり、美しい世界をつくる。そういう共通のコン

セプトが要ります。今の日本の公共事業ではそれが不十分。それを意識してほしいと西湖十景の研究を深めているのです。ここまでの私の風景論ですが、最後に急に技術っぽい話ですが、材料の選択が美しさの基本にあると思っていますので、ひと言。これ(2)は多摩川のごろたを積んでた石積みです。ここにはもともと品川用水が流れていて、護岸を多摩川ごろたで積んでいます。町田とか横浜あたりにはたくさんあります。そういう地場材料を使った風景です。

これ(3)は発生材を使った焼き物の町、常滑の擁壁(ようへき)です。常滑以外には見られない独特の風景ができています。

ここでは私の計画した「地域らしさ」のプロジェクトを紹介します(4~6)。広島県「下蒲刈ガーデンアイランド構想」です。たまたま熊本でアートポリスがあった後です。あそこへ行けば活躍中のいろいろな建築家の作品が見られる。これをランドスケープ・アーキテクトの世界でもやってみたくて思っていたわけです。今は呉市ですが、下蒲刈島という、昔、朝鮮通信使が滞在した島です。そこの一部の設計を頼まれたのですが、町全部をやろうと提案したら竹内という町長が乗ってくれたのです。国は「五全総」で「ガーデンアイランド」を構想したのですが、その十数年も前に、私たちはガーデンアイランドを提案しました。島全体を美しくして観光客を呼ぼう。離島振興法の金が入っていたころです。

ここは頼山陽のゆかりの場所だったりもしたものですから、町長の指示で美術館とか通信使記念館以外にもいろいろつくりました。いろいろな造園家にいろいろな場所と風景をつくってもらいましたが、これは数年前に亡くなった伊藤邦衛さんが修景した防潮堤です。上の写真を見ていただくと、今までは完全にコンクリートで波返しをつくっただけの非常に殺風景なものでした。それに石を積み直し、前に石組みをして荒磯の風景をつくりました。修景にひと手間加えるだけで、味わいが大きく変わるということです。後ろの建

物も移築したもので、朝鮮通信使記念館です。

石の波止場と遠くに見える島をひとつに見せているのは借景手法の活用です。海の方角に見える離島のシルエットと手前の石組風景と重ねてあります。借景は伊藤さんの遊び心ですが、石積の目地は空隙だらけにしてありますから魚も住めるビオトープにもなっている護岸です。

写真のような人工海浜もつくりました。海水浴客を受け入れるためです。昔はエビネランがたくさんあったのでこの島を蘭島と言ったので、そのことを入れています。永野重雄という新日鉄の社長がいましたが、そのご兄弟はみんなこの蘭島で生まれています。小さな島から大物がたくさん出ている。やはり美しい島から出た人にはいい人がいます。

景観づくりの手順で最初のステップは、まず第一に市民の目で町の良さを発見することです。「せたがや百景」以来、私は東京の三鷹市や江戸川区など幾つもの百景選びをしました。ここには長野県と福井県「ふるさと百景」の本を挙げました。ランドスケープでは、土地や地域や場所のおもしろさをどう読んでどう編集するかが大切だと思います。

次に本物のデザインをすすめるためのチェックについて。『アメニティデザイン』の私のデザイン・チェックリストでは、「Physical:安全で便利で、Visual:美しく、Ecological:エコロジカルで、Social:地域らしさがある、地場材料が使われ、地方(じかた)技術が活かされて、そして、ふるさとを感じられるか、Mental(or Spiritual):感動でき、原風景性があるか。以上PVESMとっています。ドイツ語でGemutlichゲミュートリヒという言葉があります。「ゲ」は山並み。山で包まれた雰囲気という意味です。京都とか小京都と言われるのは、ほとんどこの雰囲気です。小宇宙盆地です。山に包まれた山並み座標軸があるので落ち着いた小世界ができていたのです。

次にローカリティをどのように発見するか、また捉えるかです。よく田舎の

首長さんに会うと、たいがい「うちには何もないんです」と言われます。それで私は地域資源の発見法を考察して「LMN法」と名付けました。light upして、mean itして、name itすればすべてのモノは資源になる。光をあて、意味づけして、名前をつける。そうすると、1軒の家、1本の木、1つの岩、谷や川、すべては観光資源になる。私はそう思っています。どこの土地にも必ずそれなりのものはある。それをさらに輝かせるには郷土樹木や地場材料や地方技術を全面活用する。そういうのを『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法』(進士五十八編、学芸出版社)という。

「美しい景観・いい風景」への原則をここに挙げました。ただ皆さんに意外なのは最後の「⑤農林業、歴史文化など地域環境を保全し、地域らしさを目指すこと」でしょう。「農林業」とあるからです。デザイン云々よりも、その基本には「大地」、それはとりもなおさず「農林業の活性化」ということです。修学院離宮に後水尾上皇は水田を取り込みました。大和郡山の慈光院もそうです。遠くの若草山はもちろんですが、その間に広がる大和平野の田園風景がどんなに効いているかお気付きにならない人が多い。アーキテクトはつい建物という「図」にフォーカスが絞られるから当然と言えば当然ですが、ぜひその背景にある「地」の意義を考えていただきたい。

実は2004年の「景観法」、法律をつくる時、国民への「景観教育」をしっかりやれという付帯決議が国会でなされました。それで、国土交通省公園緑地・景観課で私が委員長になって「景観まちづくり教育・3つのアプローチ」という行政マンと子どもたちと市民のための手引き書をつくりました。国交省のホームページに入ればありますので、ご覧いただければと思います。

いろいろ申し上げたいことは尽きませんが、時間ですのでこのくらいに。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 進士さま、ありがとうございました。今一度皆さま、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

aaca30周年記念事業 景観シンポジウム

ローカリティを魅せるしつらえ

～建築、ランドスケープ、アートの所作～

■ パネルディスカッション

<パネリスト>

原田麻魚 (マウントフジ・アーキテツスタジオ)

平賀達也 (ランドスケープ・プラス)

鷺田めるろ (キュレーター)

<モデレーター>

宮城俊作 (設計組織プレイスメディア)



宮城俊作氏

宮城 皆さん、こんにちは。今回のシンポジウムのモデレーターと申しますか、ファシリテーターを仰せつかっております宮城です。私は実は建築美術工芸協会の会員になりましたのは2年前でございまして、いきなりこのシンポジウムの企画をしてほしいと言われ、いささか困ったことになったと思いました。というのは、進士先生の後にお話をするのは非常に難しいです。今まで

も学会やいろいろなところでお話をいただいておりますが、お聞きになった方はすでにお分かりのように大変幅広く、かつ分かりやすく流暢に話をされますので、その後やるのは大変だと経験的に分かっておりまして、困ったことになったなと思いました。

それはさておき、今日はテーマとして「ローカリティを魅せるしつらえ 建築、ランドスケープ、アートの所作」という題がついています。私からは最初に5分～10分間程度で今回のテーマについて少しお話をさせていただこうと思えます。

その前に今日皆さんの前にご登壇いただきました3名のパネラーの方を簡単にご紹介いたします。中央、原田麻魚さんです。建築家、マウントフジ・アーキテツスタジオを主宰されておしま

て、ご存じだと思いますけれど、今年度のJIA 建築大賞を「道の駅ましこ」で受賞されています。

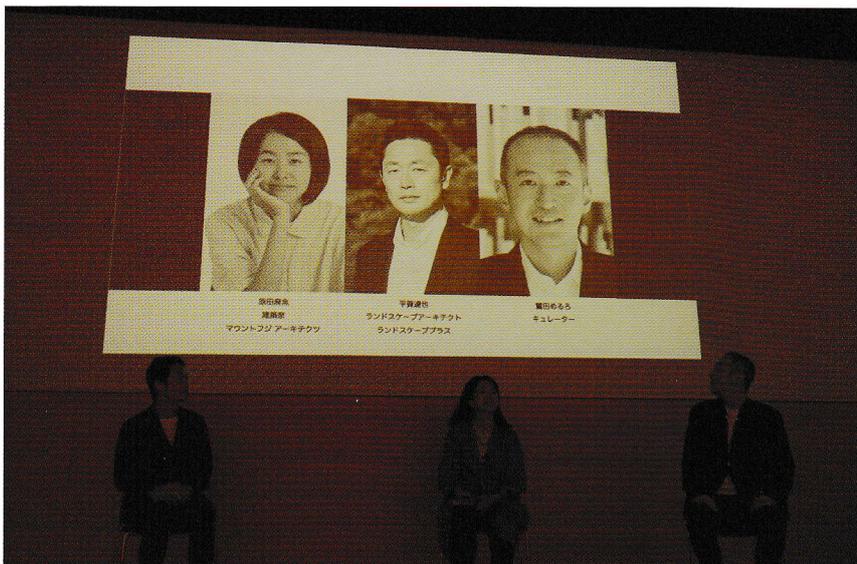
お二方目が、皆さんから向かって左側、平賀達也さん、ランドスケープアーキテクトでランドスケープ・プラスという事務所を主宰されております。南池袋公園、よくご存じだと思いますが、新しい時代の都市公園の一つのモデルとして、大変広く認知されているものですけれど、その設計者でございます。

お三方目、一番右側です。鷺田めるろさん。アートキュレーターでございまして、実は今年の3月末まで金沢の21世紀美術館のキュレーターを務めておられました。現在はフリーランスのキュレーターですけれども、あいちトリエンナーレ2019のキュレーションを担当しておられます。

今日はこういった3名の方にご登壇いただきまして、私も含めてこのテーマについて、少しお話をさせていただきたいと思えます。

最初にこのテーマについて、簡単にご説明と申しますか、こういった経緯で着想したかをお話しさせていただこうと思えます。

最初の写真、場所はどこかといいますが、奈良の興福寺、南円堂の前です。外国人の旅行者が浴衣を着て、みんな向こうを向いてしまっているから本当に外国人かどうか分かりませんが、こういった光景がここ数年、京都、奈良だけではなく至るところで目につくよ



うになりました。別にインバウンドの旅行者に対して日本がどういうしつらえをするかを今日ここで話しておくわけではないのですが、この発端としてこういうことがあります。

これは日本政府観光局が毎年出しています訪日外国人観光客数のデータです。ご覧のように東日本大震災があった翌年から爆発的に人数が増えています。例えば20世紀末、つまり西暦2000年以前ですと、年間でもせいぜい200万人～300万人程度でずっと推移していたものがいきなり増えていくわけです。そうしますと日本にいるわれわれにとっての外国人旅行者のステレオタイプみたいなものがもう通用しなくなってきました。今年はまだ3,000万人を超えますし、来年度、2020年に向けては4,000万人と日本政府は算盤勘定しているわけです。

そうしますと外国人旅行者の目線の高さが変わってきていることに気がきます。特に私のように、週末を自分が生まれ育った京都の宇治というところで生活していると、年間500万人ぐらい観光客が来ますが、私が子どものころに見ていた観光客と今は全然違うと感じます。というのは彼らの目線がわれわれ生活者の目線にだんだん近づいてきているということなんです。日本人と同じような経験をしたいという人たちが増えてきます。そうしますと、我々はローカルな場所を観光の対象としてみるのだけれど、同時にそれに対して、外国人旅行者を介してグローバルというものを意識せざるを得ないような状態になってきているのではないだろうか、そのことが発端です。

今日のお三方の中で、例えば平賀さんなどはこの辺りのお話をしていただけるようです。ただ、われわれとしては

今まではローカルとグローバルの間にナショナル、つまり日本あるいは日本らしきみたいなことを意識せざるを得ないような状態が続いていて、この日本というフィルターを通して世界、グローバルなものやローカルなものをつなぐという思考回路ができていたのではないかと思います。ただ、今はこれだんだん通用しなくなって、ナショナルというか、日本というフィルターがだんだん薄らいでいって、ローカルとグローバルがダイレクトにつながる状態がたぶん生まれてきています。(1)このような現象が起こった背景には当然SNSあるいは情報通信手段の多様化、高速化がものすごく大きく作用していることは事実だと思います。

そうしますと、例えば日本を乗り越していきなり地方都市のどこかが世界とつながるといえる状態ができてくる。特に若い世代の人たちの場合には、ビジネスの世界だと日本を乗り越していきなり世界とつながることが当たり前になってきている。さらに言えばその下のそれぞれの地域、都市のもっと小さな部分が世界とダイレクトにつながっていく、こういう形が出てきているだろうと思います。

ですから、私はこのテーマの中ではローカルとグローバルなものがどうつながっていくのか。そのときに何をどう考えればいいのかについて、なんとなく分かりそうな、はっきりと分からなくていいと思いますが、こっちの方向ではないか、みたいなところが見つかるのではないかと思います。

今日議論していただく一つの視点として、まずこの問題は東京と地方が対立しているというような構図の中で捉えるものではないということです。二つ目は、先ほど進士先生のお話にもありま

したが、われわれ専門家と市民が対峙するような構図の中で考えるべきことでもない。さらに言えば紋切り型の定型句××〇〇らしきみたいな話でもないのではないだろうか。こういった辺りをまず一つの前提にして話を進めていければいいと思います。

もう一つ、このテーマの中に「しつらえ」という言葉があります。アートでもないし、デザインでもないし、建設、コンストラクションでもなくて、「しつらえ」です。そこには、いくつかの意味を込めました。しつらえというのは場をセッティングすることであり、形を作ることではないということ、それが一つです。二つ目は、しつらえという言葉は誰に対してしつらえるのかということに常に考えることになりますので、他者に対する想いをそこに反映させるといえる意味があります。三つ目が、当然のことながら専門家だけではなく、誰もが関わることができるということ。この三つの意味をこの「しつらえ」という言葉に込めてお話ができればいいかなと思っています。

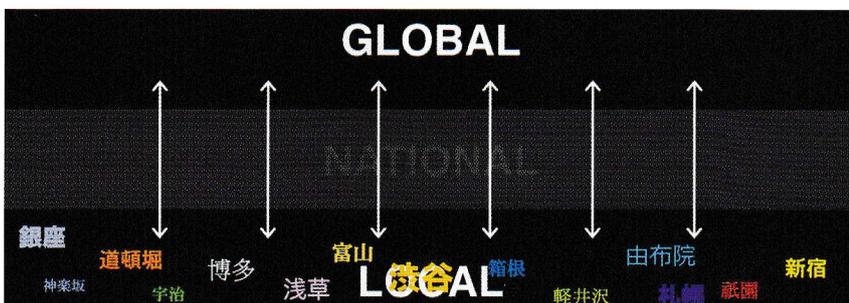
それでは、ここからそれぞれの方にプレゼンテーションをしていただきたいと思っています。

最初に平賀さん、お願いいたします。



平賀達也氏

平賀 ただいまご紹介いただいた平賀です。私からはランドスケープアーキテクトの立場でお話をしたいと思います。





3

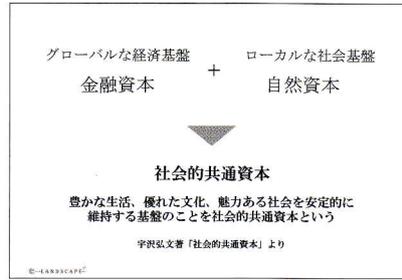
冒頭に宮城先生が進士先生の後で非常にやりづらいというお話をされましたが、私は業界の大先輩であるお二人の後なのでもっとやりづらいのですが、いただいている「ローカリティを魅せるしつらえ」というテーマを「グローバルに支持されるローカルな価値づくり」という視点からお話をしたいと思います。

まず、世界共通の課題として地球温暖化や生物多様性の喪失といった人間の活動に起因する環境問題があります。また、グローバル化の進展による経済格差の広がりが国家間や宗教間による憎しみの構図を生みだしています。これは2015年のパリの同時多発テロの写真ですが(2)、そういったグローバルな地球人として解決すべきローカルな取り組みが求められているのではないかと考えています。

その一方で、地球規模で地震や豪雨等の自然被害が増えている中、地球活動の変動が人間社会に大きな影響を与え始めていると考えられます。東日本大震災は1000年周期で起こる地殻活動の引き金になったと言われていました。そういった地球規模で解決しないといけない問題に対して、例えばヨーロッパではEU(ヨーロッパ連合)という新たな組織体で国家の枠組みを超えて様々な問題を解決していこうとしています。環太平洋火山帯の一部を成す日本も、アジア太平洋地域というつなが



6



4

りの中で、われわれの生命を支えている自然資本の価値やリスクを他の国々とトータルに共有していく必要があると思います。

私が最近そのようなことを考えるきっかけになったのが先般の北海道地震です。これは厚真町の風景です(3)。皆さんもこの写真をニュースでご覧になったと思います。先住民であるアイヌの人たちは過去に経験したこういった自然災害を神話とか地名に置き換えて伝えてきたということが言われています。今われわれが生きている時代が地球活動の安定期から変動期に移行しているとすれば、安定した社会を志向する工学的な視点だけではなく、変動する環境を前提にした地球科学的な視点から未来を捉えなおす必要があるのではないのでしょうか(4)。

現代社会が抱える問題の根源はグローバル化が進むことで生まれた金融資本の仕組みと、それぞれの国や地域が支えてきたローカルな自然資本の価値をつなぎあわせる手法を未だ見いだせていないことにあるのではないかと私は考えています。

地球規模で地域社会を考えるという視点において、時間軸と空間軸をどのように捉えて議論するかということが非常に大事だと思っています。そういった意味では変化の速度が著しく早い現代社会において、進士先生の「時間を考える」という姿勢には私も非常に共



7

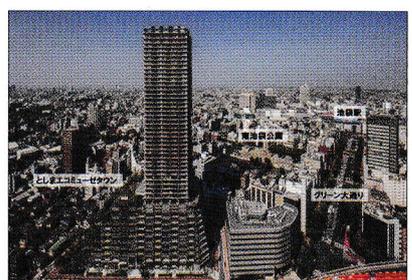


5

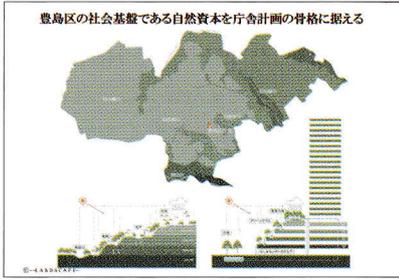
感します。グローバリティとローカリティのつながりを考える上で、ここに書いてありますが、宇沢さんがおっしゃっている社会的共通資本という考え方は、今回のテーマを議論する上で大いなる示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

そういった社会的背景の中、今環境・社会・企業統治の貢献度合いによって投資先を決めるESG投資のような新たな金融資本の動きが世界的にあります。先ほどご紹介した気候変動リスクに対する動きはUN(国際連合)が先導して行っていますが、2006年にESG投資の基礎的なルールを作ったのもアナンさんが国連の事務総長をされていたときです。今までの金儲け優先の投資の在り方に対して警鐘を鳴らしたのです。アナンさんは2000年にもミレニアム開発目標を掲げられて、それが2015年に国連サミットで採択されたSDGsの活動につながっています(5)。グローバルな開発目標を掲げながら発展途上国のみならず先進国にもローカルな問題解決を促しているのです。

これはバイオフィリックデザインといわれる手法で計画されたGoogleのマウンテンビュープロジェクトです(6)。私はバイオフィリックデザインの手法にローカルな社会的共通資本の価値を見出す可能性があると考えています。テクノロジーと自然科学の融合した持続



8



9

可能な環境は、人間の創造性を刺激して知的生産性を向上させる効果があるといわれています。世界企業によるこういった取り組みが近年拡大しているESG投資を呼び込む一つの大きな流れになっているといわれています。

バイオフィリックデザインに代表される人間の営みと自然の佇まいが融合しているかのような風景は、古くから日本の生活の中にもたくさんありました。江戸時代の庭園都市といわれるような都市風景はまさにバイオフィリックデザインなのです。崖線の湧水や潮の干満を利用した江戸の池泉回遊式庭園を、それぞれの場所が持つ自然の力を最大化する装置として捉えていくと、今日私がこの後に紹介する豊島区原風景に立脚した庁舎や公園の設計思想をご理解いただけるのではないかと思います。

これが豊島区原風景としての庭園都市です(7)。現在、豊島区は2020年のオリンピック開催に向けて、グローバルに支持されるローカルな価値づくりを目指して、芸術や文化を軸に据えたまちづくりを進めています。今日は豊島区におけるローカリティの魅せかたを紹介して次の議論に繋げることができればと考えています。

池袋のある豊島区は日本一の高密度都市でありながら、2014年に日本創成会議から区内唯一の消滅可能性都市と指摘されました。その指摘をバネにして、



10

逆にその公共空間を官民が一体となって活用する手法に取り組んでいます。

この手前にあるのは豊島区の新しい庁舎です。その奥に南池袋公園があります(8)。庁舎の上にマンションをつくるという取り組みでしたが、この事業を推進していく上で議会や区民に合意を得る必要があったので、私のほうでは豊島区の歴史や文化の基盤である地形構造に着目して、豊島区や池袋が発展してきた由来や経緯を調べました。右の下が豊島区の庁舎の概念図です(9)。豊島区の標高差が建物の高低差と同じであることに着目して、建物そのものを地域の自然や文化を守り伝えていく社会的共通資本としてつくったらどうかという提案をしました。これは実際にできた庁舎の屋上にある「豊島の森」といわれている場所です(10)。豊島区の台地にあった屋敷林を再現しています。ここでは建物に降った雨を循環して、こういった川を流しています。池袋周辺における都市再生の最終目標は、もともとたくさん流れていた小川を復元するという未来に向けたまちづくりのビジョンを掲げてプロジェクトを進めてきました。

そういった流れを踏まえ、次に南池袋公園のデザインに移行していくわけです。調べてみると、もともと池袋周辺にある公園は小さな河川の湧水、つまり水が湧き出た場所だったということが分かったのです(11)。神田



11

川の源流が井の頭公園であったり石神井川の源流が石神井公園であったり、公園という場所は時代の政治体制や社会制度が変われど、地域の自然を地元の人々が守りつないできた場所であることに気づきました。そういった背景に思いを寄せて、都市化された池袋を地域のための快適で安全な場所に再生していこうということでこういったマスタープランをつくって計画を進めていきました(12)。都市化されたまちの中にも地域の文化や芸術をつなげる自然資本としての社会基盤づくりが再生できるのではないかと思います。

豊島区の新庁舎は官民連携のリーディングプロジェクトですが、南池袋公園はこの官民連携に加えて、地元を巻き込むことに挑戦した官民公連携のプロジェクトでした(13)。近代の都市化は地域の自然資本に由来したコミュニティや、例えばお祭りのような風習が形骸化して喪失していくわけですが、行政と地域をつなげる「新しいしつらえ」が公園という場所に求められたのではないかと思います。公園という、公共財としての自然資本と民間企業の金融資本を活用して地域の価値を高めるために地域の人々が協働で助け合える場所づくりと仕組みづくりを行ったことがこの南池袋公園がいま国内外のさまざまな方々に見に来ていただいている背景としてあるのではないかと思います。



12



13



14

また、この公園は雑司ヶ谷という非常に歴史のある地区に隣接していることもあり、地域の文化継承の場として、こういった大田楽というお祭りをを行っています(14)。お米の収穫に由来したお祭りがいまだ都市の中に形骸化して残っているのですが、それを超える、人々が集まる理由みたいなものを行政主導の文化イベントが担っているのではないかと考えています。日常時の快適性が災害時の安全性につながるようなこういった公共空間、パブリックスペースこそが、地球活動の変動期における「グローバルな社会に支持されるローカルな価値づくり」のヒントになるのではないかと考えています。

途中、画面が乱れてお見苦しい点がありました。私からの問題提起は以上です。ありがとうございました。(拍手)
宮城 続いて原田さん。



原田麻魚氏

原田 建築家の原田といいます。MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO という設計事務所で、私とあともう1人の原田と二人で設計をしています。

今日は「道の駅ましこ」というプロジェクトを中心に風景や景観について考えていけたらと思っています。

今回ご紹介するプロジェクトは益子町にある道の駅です。益子は東京から90キロぐらい離れたところにある田舎の町ですが、陶芸の町として非常

に有名な場所でもあります。行くには車で行かないとなかなかたどり着けないような田舎です。

ここに道の駅をつくりたいというお話をいただきました。当時、道の駅はいろいろな補助金、全部で四つももらったのですが、主には国土交通省が長距離ドライバーの休憩施設として位置付けて補助金が出ており、遠方から車を利用して来る人の為の施設です。しかし益子では、道の駅といいながらも何かこの場所のためになるものをつくりたいというお話をいただきました。

益子はすごくおもしろく、ここに「ミチカケ」「土祭」の写真(15)を載せましたが、もともと濱田庄司が作陶のために自宅を移した場所です。濱田庄司は民芸三人衆のうちの一人で、民芸運動の先駆者でもあります。その場所のなりわいとか手の動きから出てくる用の美のようなものを認めた中の一人です。ですから、この地域にいる人たちも一つ、プライドとして自分のまちとは何だろうなというようなことを考えている、その中の一つで土祭などの地域の在り方を表現する祭りや冊子がありました。

そのような住民が地域性を自覚している益子に対して私たちが答えるときに、合い言葉にしたのは「風景でつくり風景をつくる」ということです。進士先生の後で、何の打ち合わせもないのですが、この言葉を一つ旗印に益子の道の駅をつくってきました。

現在の道の駅です(16)。後ろの山々の手前のこの木の架構体ですけれども、山の形、もちろん形もそうですが、それから、使っている材料も含め、その場にあるものをかき集めるような建築のつくり方を目指しました。

これは遠景ですね(17)。

もともと益子の町は陶芸で有名です

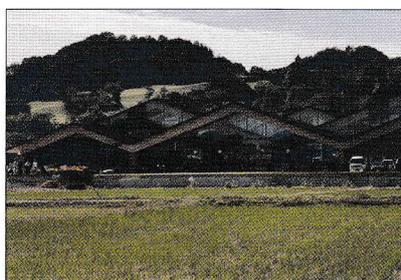
から、もっと陶芸の町の中心地に近いところにつくれないかという話もありました。だけど、たまたまここが用地だったのです。田んぼのど真ん中です。低い里山に囲まれたような場所です。ここで益子のためのものをつくるということになりました。私たちは益子の人たちとアイデンティティを掘り下げてみたいなと思っていました。そのアイデンティティがおそらく「風景そのもの」として立ち現れるのではないか、ということを考えていました。

この建物で試みたことは単純です。構造体も仕上げ材もすべてその場所にあるものでつくってみよう。形についても非常に合理的な構造力学に基づいているのですが、その場所ならではの風景として形づくってみようと考えていました。具体的にいうとこの木の架構体、屋根は木材できています。木材は、益子町の町有林100%では残念ながらないですが、町有林を伐採してもらい、3割ぐらい使用しています。そのほか7割は栃木県の木材で集成材を製作し、山並みのような架構体をつくりました。

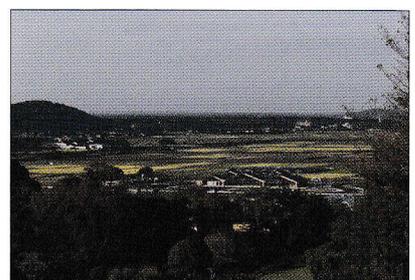
実は、地域の木材を公共建築物で使うというのはなかなか難しいことです。公共建築は入札で施工会社が決まります。そこから施工の段取りをして集成材を買いつけようとする、もう町有林を伐採して乾燥させて製材してというスケジュールが乗ってこなくなるのです。どうしても市場に出回っている材料を建築では使うことが多くなってきます。ですから、私たちは基本設計段階の、実際の建築工事に入る1年ぐらい前に、この架構体の設計を決めました。もちろん集成材のサイズを変更できなくなるというリスクはありますが、構造の力学的な幾何学は変更しないことをルールとして決めました。と同



15



16



17



18

時にプランの変更には耐えうるという構造計画を考えました。

この構造計画ができたがゆえに実施設計を終え着工する1年前に町有林の伐採をしていただきました。町有林を伐採して1年かけて乾燥、製材を準備していました。それをしないと公共建築物で目の前にある森の木を自分のまちの建物に使うには制度的に難しいのです。それを可能にしたのがこの構造の考え方です。

具体的には、一番スパンが飛んでいるところで、32mあります(18)。32mを木材でかけ渡すのは構造的には挑戦ですが、そこには1m×12cmの梁を60cmピッチで架けています。

こちら側、写真の左側ですが、ここは短いところで10mですね。そういったところは同じ1m×12cmの集成材ですが、1200ピッチ、1.2mピッチで梁をかけています。構造的に負担が大きいところはピッチを小さくして、構造的に楽なところはピッチを広げる。ただし材料は全部同じものを使うという構造的な解決を見つけたがためにこういった地場産材を公共建築で実際に使うことが可能になりました。

この写真は、町の方々の協力があったのですが、実際にこの目の前にある森にある杉材を伐採させていた時のものです。この写真は製材中のもので、栃木県集成材組合という地



19

元の集成材会社に依頼して集成材の製作まで実施しました。その後請負ゼネコンがこの集成材を購入することで、地場産材の循環が実現しました。

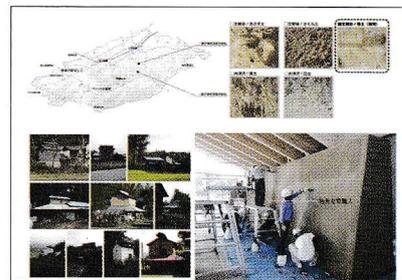
こういった梁のピッチで平面の変更に対応するという構造計画によって、平面計画の柔軟性が集成材の発注に影響されないかたちで実現し、それが空間のデザインにもなっています(19)。

この写真は、屋根を支える壁の部分です。益子は陶芸の町なので土が沢山とれます。ただ、陶芸の土と建築の左官の土は全く向き不向きが異なっていて、陶芸に向いているから建築の左官材、建築の材料として使いやすいかというところではないのです。

益子の町をずっと歩いてみると、米葉小屋、たばこの葉っぱの乾燥小屋が今も残っています。益子はもともとたばこの葉っぱの生産が盛んでした。農家にこういう小屋が残っています(20)。外壁は土でつくられています。きっとそこある土でそこお父さんたちがつくった小屋だと思いますが、この景色がすごく美しいと思っていて、今回の建物にもこの技術、生業を使っています。

実現するためには土のブレンドを考えないと建築にはなかなか向かないのですが、あちらこちら畑(陶土の取れる場所)を見せていただいて、土の色と性質の良い配合を探して塗っています。

施工の際も地元左官職人を町役場に探してもらって、施工チームに加わって



20

もらっています。この写真の真ん中にいる青いシャツを着ている方がいつも私たちと一緒にやっている左官職人さんで久住さんです。その場所の土100パーセントで樹脂やセメントを入れずに仕上げるのはすごい技術ですが、そういった技術をもっています。土壁なので当然、何かぶつくと崩れたりします。その修理は地元の左官職人さんにやってもらうということで、技術の伝承と生業の保存を一緒に行いました。

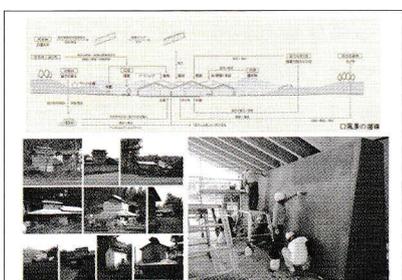
こういったことはこの建物のあちこちでやりました。木材、土(21)、売り場の台などもすべて益子の人とものでつくっています。

また、この道の駅ができた後も、いろいろな人が参加してくれています。これは、いわむらかずおさんという絵本作家さんですが、益子に住まれていて、この野菜売場のサインを描いてくれています(22)。

これも町のおじさんが趣味でこういう道の駅の建物を模した何か、置物をつくって売ってくれたりしています。

また、これは、私たちはデザインしていないのですが、什器もこういう材料で、こういうふうにつくりましょうと提案すると、先ほど進士先生から出てきましたが、百姓が多いのです、農家でありながら手が非常に器用。ですから、町の人がこういう什器をつくってくれました。

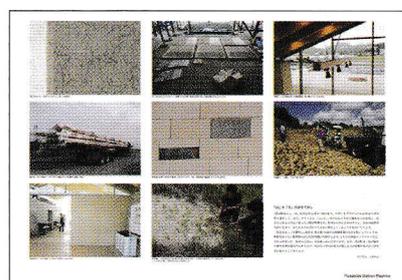
あと、鉄の職人さんもいらっやっやっ、



21



22



23



24

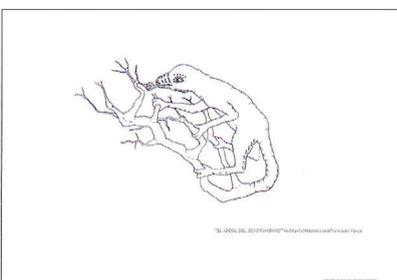
ごみ箱を製作して持ってきてくれました。

ここはまたちょっと違って、私たちのほうである程度コントロールしたところなんです。床のたたきなどの細部もデザインしています(23)。

あと、ここはキッチンカウンターですが、震災で登り窯がたくさんつぶれてしまいました。何十年も使っていた登り釜の内側にあった耐火レンガは、飛んだ釉薬が流れてすごくきれいでしたので、その壊れた登り窯から拾われたレンガを使用しています。これは久住さん(左官職人)です。一緒に土を探しているところです。このようにまちに出てその場所の素材を探すということの一つひとつやりました。

益子町の町長と話をしている中ですが、益子の道の駅のおもてなしは益子のものでやろう。益子といえば山と土だということで、益子のおもてなしは山と土でやろうというふうに話しました。

この写真は左官壁です(24)。中に構造体としてコンクリートの壁が入っていますが、そこに土を塗っています。土は一切樹脂もセメントも入れていません。本当に土と砂と藁だけでつくっています。ですから、ある意味補修がしやすいですね。セメントを入れてしまうと、どうしても色が変わったりしますが、これは100%その場のものです。この配合レシピも町に置いてきています。また、地元の左官職人に施工



26



25

チームに入ってもらったので、補修の時に土を塗れる職人さんも町にいます。

これが町の中心部のほうを見た風景です(25)。実は人口2万7000人ぐらいの小さな町で、補助金をいただきながら、といっても税金も使うので、反対運動もありました。反対していた人は町の中心部にいた人が多かったようです。陶芸の有名な窯元さんが沢山ある町の中心近くの人たちからは、なぜ町の中心につくらないのかという意見もありました。しかし、この道の駅が出来てから今になってみると、ラジオや地元の新聞があるのですが、益子町の紹介を「里山の町」とするようになったのです。今まで「陶芸の町」という紹介でしかなかったのですが、この益子にもう一つ「里山の町」という呼ばれ方もされるようになりました。

この写真の向こうの方、町の中心の方から来る老舗窯元のお母さんが、「益子ってこんなきれいなところだったのだね」と言ってくれました。

建築をつくるということは、どうしても人工物をつくることなので、何かを犠牲にしている部分もあります。が、ローカリティやグローバルを意識してこの後、進んでいく小さな町を考えたときに、疲弊しないだけのアイデンティティを一つひとつの場所に持ってほしいなと思っています。そういう意味で益子の道の駅のつくり方は成功したかなと、そのお母さんの話を聞いて思いました。

これはチリの生物学者の本ですが、『知恵の樹』という本があります。その本の表紙で、すごく共感する絵です(26)。建築というのは何か問題があって、それを対象として、そこに対する何か一つの恋い焦がれるような解答だとして示すという一筋の思考の流れと捉えられることが多いのですが、同時に私たちは解

答者ではなく、その問題に含まれている一部であるという認識がすごく大切だと思います。私たちを含んでその問題であり、環境であるということもいつも考えています。

環境と連続しながら何かの存在を織り込んでいくということであれば変化したり、揺らいだりしていく状況に肯定的に向かっているのではないかと。出来上がって停止してしまう解答ではなく、対話するもの、何か対話の受け皿のようなものをつくっているつもりで建築という行為を考えています。(トカゲの絵を見ながら)自分が食べている実であると思っていたら、いつのまにか自分の一部であった。私たちは自分も含め問題であり、環境であり、風景なのだということを考えると、何か問題や解答という他者的な対象ではなく、話し合う、対話する相手に世界が見えてくる、そういう立場で建築をやっております。

全然まもらないで申し訳ないのですが、今日のシンポジウムの一助になればと思います。(拍手)

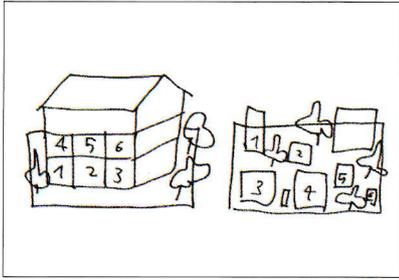


鷺田めるろ氏

鷺田 鷺田めるろです。金沢に住み、美術に関する仕事をしています。

景観と美術を考えると、「亀」と「瓢箪」、この二つが大事だと考えています。

まず、「亀」について。私がずっと勤めていた金沢21世紀美術館の設計者の一人である西沢立衛が森山邸という住宅をつくっています。敷地の中に六つの住居がバラバラになっている建物です。その建物を原広司さんが見たとき、「これは亀みたいだ」とおっしゃいました。それは、家の中に生活が閉じ込められているのではなく、亀が手や足を出したり引っ込めたりするみたいに、家の外に生活がにじみ出ている

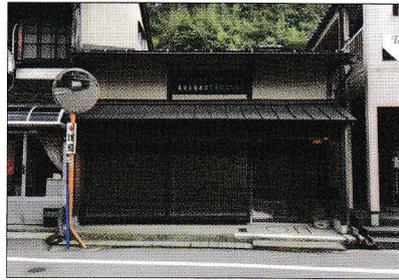


27 出典: https://www.tozai-as.or.jp/mytech/07/07_nishizawa02.html

という意味です(27)。このように、生活が町の外ににじみ出ることが、景観を考えるとときに重要だと思っていることのひとつです。

これは私の家です(28)。120年ぐらい前に建てられた家を5年ほど前に買い、改修しました。仕事もこの家でしています。かつては桶屋さんでした。隣は魚屋さんです(29)。お刺身がほしいとき、この魚屋さんにお皿を持っていきます。最初に持っていった白い無印良品のお皿があまりよくなかったようで、「面白くない」と言われました。それで九谷に行って、これだったらいいかなというのを買いまして、恐る恐る持っていったら合格点をいただきました。お刺身をそのときあるお魚でつくってもらって、後で取りにいくというシステムです。

向かいは昔、酒屋さんでしたが、今のお店はやっておらず、シャッターは閉まっています。でも植物の手入れをするのが好きな方で、いつも周りにいっぱい



28

植木鉢を置いて世話をされています。

家の前の道を行くと神社があり、ときどきお祭りがあって屋台が出ています(30)。ただ、この屋台はよそから来るものです。家の前に仮設的にしつらえられます。

これと比べておもしろいのは、金沢マラソンというイベントです。市民マラソンですが、自分の家の前を走ります(31)。周りに近所の人が出てきて応援をします。この写真は私の隣の隣の家です(32)。1階は普段は駐車場になっています。マラソンが行われるときは車をどこかに移動させ、町内会が持っているテーブルを出して、お菓子を載せています。走ってくる人が途中でこのお菓子をとりて食べられるように出しています。

真ん中に座っているのが松井さんです。魚屋さんの隣でマツイストアという八百屋さん兼スーパーを営んでいます。このお菓子がなくなると、自分のお店からお菓子などを持ってきて、開けて



29

ここに出しています。

みんなはお酒のケースに座っています。昔酒屋さんをやっていた向かいの広岡さんのところに酒のケースがまだありますので、それを借りて座っています。

先ほどの屋台はここに住んでいる人の生活がにじみ出てきているわけではありません。ところがこちらのほうは近所の人たちが自分たちの持っているものを持ち寄ってカウンターを仮設的にしつらえている。これは生活が町の中ににじみ出てきている状態、つまり亀が腕を伸ばした状態ではないか。私はこういう在り方が景観にとって重要だと考えています。

もう一つの「瓢箪」は、山本理顕さんがよく図で使われるものです(33)。住宅の中に瓢箪のように二つの空間がある。瓢箪の下のほうのふくらみの部分はプライベートのスペースで、上の部分のふくらみはパブリックなスペース。つまり家の中にパブリックな部分が入り込んでいるということをおっしゃっています。例えばギリシャの住宅でも個人の家の中にパブリックなスペースが入り込んでいるけれども、それが失われてきたのが20世紀であるという捉え方をされています。家の中にパブリックなスペースをつくるのが大事ではないか。

これは私の自宅の中に入ったところ、



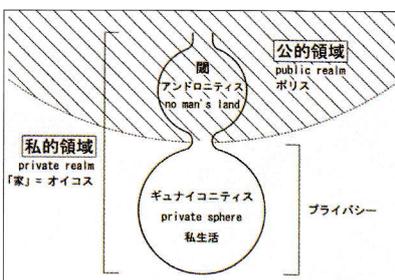
30



32



31



33 出典: 山本理顕『権力の空間/空間の権力』講談社、2015年、p.25



34

仕事場にしている「ミセノマ」です(34)。近所の方はガラッと開けて普通にここまでは入ってきます。ところが宅急便の方はベルをピンポンと押し、引き戸の外で待っている。近所の方はここが桶屋さんだった時代の振る舞いが身につけていて、「ミセノマ」までがパブリックスペースであるという意識を持っています。ところが宅急便屋さんはそのコミュニティを共有していないので、「ミセノマ」はプライベートなスペースであるという認識をしています。その差はおもしろいと思っています。

さて、景観と美術というときにぱっと思い浮かべるのは、「パブリックアート」です。ビルを建てる時、前に誰でも入れるスペースをつかって、彫刻を置く。ただ、私はこのような景観と美術の関係に対して違和感を持っています。

空地をつくるのがビルを持っている会社の土地をパブリックに開いていくことと考えれば、それは「瓢箪」ということもいえるかもしれません。ただ、そこに置かれているアートと会社に勤めている人との間にはあまり関係がない。その意味では先ほどのお祭りの屋台のような存在ではないかと思っています。

では、美術はどうあるべきか。ヒントになるのは、高山明さんという演劇の人の言葉です。われわれは普通「演劇」というと舞台上で演じられるもののことを想像しますが、ギリシャで演劇、theatron(テアトロン)といったとき、そうではなく、舞台を見てい

る観客席のほうが演劇なのだとおっしゃっている。つまり、まちの人々が集まってきて、舞台上で行われている劇を見て、その劇をネタにこのまちは今後どういうふうにしていくべきかという政治を語ることが演劇という体験である、そういう捉え方をしている。

それを美術に置き換えると、美術はさっきのマラソンみたいなものではないかと思いました。マラソンという日常生活ではないものが年に1回行われる。そのときにみんなが観客席をつくって、そのマラソンを見る。見ている人たちがそこに机を出したり、椅子をしつらえたりして、そこで場ができる。そういう経験を生み出すものが景観にとっての美術ではないかと思いました。

通常の美術の捉え方からすると正反対のような考え方ですが、まちの中に置かれる美術作品、いわゆるパブリックアートのような形を持った作品がその景観にとってよいアートだとは私には思えない。そこで暮らしている人の生活が外ににじみ出てくることを促すような仕掛け、あるいは逆に普段閉じられているプライベートなスペースに人を導き入れるような仕掛けこそが景観にとって重要な美術ではないかと思っています。(拍手)

宮城 ありがとうございます。決められている時間が45分なので、ここからいままお三方からお話しいただいたことをベースにして、少し意見交換、ディスカッションをしたいと思います。

お聞きいただいたように、三人三様でございました。ローカリティというものへの捉え方にこれだけ多様性がある。この多様性は進士先生が先ほどおっしゃったように風景を考える上では非常に大事なことです。立場も時間も場所も違う中での捉え方に多様性があることが大前提だということなので、あえて3人の方に共通のテーマ、一つのテーマで考えるのではなく、むしろ1対1のトークのような中でそれぞれの方でもしご意見があればそこでいただく、そういう形で進めたいと思います。

まず、平賀さんにお聞きします。最初のグローバルなものローカルなものがどうつながるか。これは私が最初このシンポジウムのテーマとして考えたということでお示したのですが、これは比較的ダイレクトに表現していただいたと思います。そこに出てきたのは自然資本という考え方です。それを実践する中で池袋あるいは豊島区ですが、ここ全体のまちづくりの中の自然資本をどうやって空間化あるいは景観化するかということに腐心されておられる、そのプロセスを紹介していただきました。対照的であったのはグローバルに支持されるローカリティ、ここだったと思います。

そこでまず、私がお聞きしたいのは、豊島区の区庁舎の特に低層部のつくり方が、要するに豊島区が豊島区であるために必要であったさまざまな自然資本的な捉え方を空間要素、景観の環境の要素をうまく表現されていることです。それからアイデアの元になっていた三つの示唆と仮説の中でも、水系の一番上流部に公園があるということ、これがやはり自然の示唆として大事だということでした。この考え方は実は今から20年ぐらい前、欧米で出てきましたランドスケープアーバニズムという、つまり建築や土木のエンジニアリングをベースにするのではなく、ランドスケープをベースにして都市の在り方を考えようという、それと非常に近い部分があるのではないかと思います。そのランドスケープアーバニズム的な感覚で解くとすれば、どういう解説、解題の仕方があるか少しお話をいただけれ



ばと思います。

平賀 私は高校を出てすぐに渡米し、アメリカでランドスケープアーキテクチャーを学んだので1990年代のランドスケープアーバニズム的な考え方をダイレクトに大学で学んできました。日本に帰ってきてびっくりしたのは、まちづくりに携わる専門家が地域に残された自然や歴史に価値を見出すことなく、目新しい建築物や土木構造物をつくることを前提に計画を進めていることにごく違和感を覚えました。

自分の中では、日本が近代化を押し進めるために受け入れたアメリカやヨーロッパの流れの中にある世界標準のまちづくりみたいなものを一度否定したいという思いがありました。今豊島区でいろいろなプロジェクトに関わっていますが、豊島区のおもしろさは山手線の駅のすぐ近くに、例えば3代続く地元の不動産オーナーの方がたくさんいらして、そういう人達を説得しないと何も前に進まないのですね。

例えば新宿とか渋谷とか非常に大きな開発がなされているところは比較的グローバルな経済原理といいましょうか、効率性と利便性を最大化してしっかりと民間事業者側で稼いでいこうというような論理で計画を進めています。代々その土地を守ってきたローカルな人達に対してはそういう論理では話が通じないのですね。そこでその場所の地歴というのでしょうか。「そうそう、昔はそうだったんだよ。お前よくわかっているじゃねえか」というような、そういうところから話が前へ進んでいくんですね。ランドスケープアーバニズム的なアプローチが幸いにも有効だったということが結果として現在の豊島区を他区とは違った戦略に導いていると思います。

豊島区は23区の中でも非常に財政難だった区です。もともとあった旧庁舎が区内では一番古い建物だったので建て替えないといけないけれどもお金がないみたいなことでした。その際に協力者を募る上で地域に根差したコンセプトが受けた。南池袋公園も地域の人が見向きもしないような劣悪な環境だったので、逆に新しいことに挑戦

ができたのだと思います。

私が今日冒頭にご紹介したSDGsのようなグローバルな評価軸ですが、ああいう標準化されたルールはローカルなまちの再生を考える上ではあまり気にしないほうが良いと思っています。世界の共通課題を解決するためのよいルールだと思うけれど、多様なステークホルダーと合意形成を図る上でのきっかけ程度に考えたほうが良い。それよりも地域独自の自然資本を再発見できるデザインを私は意図的にやっているつもりです。お答えになっているかどうか分からないのですが、そういう話でした。

宮城 皆さんのほうから何かお話ありますか。なければもう1点お聞きしたい。

地元の方々に説得しないと前に進まないという話とは対照的に、一方で南池袋公園に行くと、行かれた方がかなりいらっしやと思います。いつも大変にぎわっています。お天気さえよければ、夏の暑い日も冬の寒いときも。あそこにはいろいろな人が来ています。だから人のカテゴリーでいろいろな方がいる。そういう人たちは、今おっしゃったような自然資本としてあの公園があるとしたとき、どういう感じ方をしてくれるのだろうか。それはデザインされた平賀さんにとっては何か期待するものはどういうものだったか、聞いてみたいです。

平賀 冒頭では時間の都合でデザインのお話ができませんでしたので、この場をお借りして少しだけデザインについてのお話をします。公園などの公共性

の高い事業では必ず地元説明会をやらなないといけないことになっています。私は一部の声の大きい人たちの意見だけを聞いても結果的に上手くいくわけではないと思っているので、個人的な趣味嗜好やネガティブな意見については聞いてはいるつもりはしても、一切それらの意見をデザインに取り入れることはしませんでした。

ただ、地元の人々が懐かしく話されていた夕日の美しさとか、もともとあそこには小高い丘があってそこで楽しく遊んだというような思い出話の中には、その場所の持つ何かしらの真実があるように思っています。そういった地元の人々が持っている記憶にデザインの可能性を見だして、それで私たちはリボンライダーと呼んでいますが、子どもたちにすごく人気のある丘のような滑り台をつくりました。かつての心象風景をデザインすることで地元の方は当然喜んでくれたし、場の力みたいなのが、抽象的な言葉で申し訳ないですが、浮かび上がったと思います。

先ほどの進士先生のお話にもありましたが、やはり人間というのは子供の頃に体験した豊かな感性を大人になっても大切に持っていて、私たちのデザインの中にそういう記憶を単純に感じてくれたのではないかと、そのように思います。

宮城 ありがとうございます。次に原田さんにお聞きしたいことがあります。あの建物、今日ご説明いただいて、私も一度行ったことがあるのですが、今



日のご説明の中では架構のこと、大きな造形のことはお話しされましたが、例えばプランでありますとか、あの空間がどのように使われるのかという、建築に求められる機能性についてはほとんど語っておられない。これが実はおもしろいところとか、あの建築が評価される大きなところではないかと思えます。

景観、すみません。風景ではなく景観ですが、われわれがよく使う言葉で遠景、中景、近景という言葉があります。これは皆さんご存じだと思います。その中でいうあの建築は真ん中の部分がすっぱり抜けている。今日の説明でもそうでしたし、私が感じたのもそこです。その辺りのところを少しお話いただければと思います。

原田 まさに狙って。狙ってやっているとか、あるときから意識的にやっているとは思いますが、生まれてほしい状況とか、自分がつくる場に来てほしい時間とか経験みたいなものはもちろんあるのですよね。それを手取り足取りこちらでつくらないということは一つわれわれの特徴かもしれない。

場所とか風景とか環境と建築をつくるに当たっては対話しながら作り上げていくのですが、同時にその場所に建物も含めた何か環境が生まれたとして、その環境の中で人が対話したくなる、何かをしたくなるみたいなことは常に埋め込んでいこうと思っています。ですから、大きな架構体、幾何学とか、そういったものと同時にすごく小さなディテールとか、あと何でつづられているとか、触っているときの質感とか、目でも恐らく高さとか柔らかさを感じると思いますが、そういったすごく具象的な部分について細かく積み重ねています。それは一つの建築の存在として表れるのですが、その存在を契機に豊かな時間とか経験が生まれれば、その存在は肯定的にあり得るかなと思っているのですね。

今日は造園の方も、平賀さんもいらしゃいますが、建築というのはものをつくるという意味で環境に対してエゴイスティックなふるまいに思われがちだと思いますが、それをいかに肯定的に世

の中に生み出していくかというときに、ある部分、何か関与してくる部分についてはほったらかしにして投げかけていく。そこに私たち建築家のエゴイズムの穴があることによって環境との対話が盛り込まれていく、そういうことは意識しているかもしれません。

宮城 ありがとうございます。ご存じの方がいらっしゃるかもしれませんが、オギュスタン・ベルグというフランスの哲学者がいて、彼は大変な親日家ですが、あの人が使っている言葉で僕がいつも気になっているエコシンボリズムという言葉があります。日本語では生態的象徴という言い方をしているのですが、今日のお話を聞いていると、例えば建物の材は地元産材、たばこ小屋の土壁の話がありました。しかも、道の駅ですから、そこで売られているものは地元のものだ。だから大きい意味で物質やエネルギーの循環が完結していて、そこに人が関係している。これはある意味でいうものすごくエコロジカルにサステナブルな状態ができていて、それが空間化、形を持っている景観になっているという意味で極めて生態象徴的なランドスケープになっている、その大きな枠組みをつくっておられるのだという、そういう意味に捉えていいのですね。

原田 そうですね。ベルグもコスモの話をするのですね。同じ感覚だとは思いますが、自分を含め世界の部分、そこにつながりながら存在を生んでいく、そこに一つ何か私なりに建築をつくる理由があるのかなとはいつも思っています。建築単体では建築に向かっていけない部分はあります。

宮城 ありがとうございます。そこでグローバルにつながっていくという、コスモという言葉が使われましたが、その関係がありそうです。

さらに鷺田さんにまずお聞きしたいのは、最後のほうにおっしゃった、いわゆるパブリックアートの在り方です。つまり屋外彫刻的なものが広場、外に出て置かれているものではつまらない。これは大賛成するところ、あるいは共有したい価値観です。

今、金沢にお住まいになっておられ

て、伝統的に培われてきた空間のありようとか、今日は領域の在り方の話をされていました。

しかし、実際に住んでいるわれわれはその使いこなしは分かっているけれども、外の人はそこでどういうふうにつながるかが少し分かりにくいところがあるのだらうと思います。そのときにアートのものというか、アートそのものではなくある状況をおつくりになっていると思います。それが例えばマラソンであったり、ほかのイベントで、例えば演劇であったりというふうに、現代の都市の中でそういう可能性は、例えば屋外の空間、パブリックな空間において何か可能性があるか、あるいはやってみたいとお考えのところがあれば少しお聞きしたいなと思います。

鷺田 今、来年のあいちトリエンナーレの準備をしています。美術館も会場として使いますが、まちの中の会場もあります。作品の展示や、パフォーマンスをきっかけに、見に来たお客さんが、普段は入らない建物の中に堂々と入る経験をするのも重要だと思います。美術をつくる人は、美術自体がまちづくりに役に立つことを考える必要はないと思います。それが展示されることがきっかけとなって、見に来る人が普段乗り越えない境界を乗り越えるレッスン、トレーニングになればいいと思います。

宮城 アートはマラソンみたいなものだ、まさにそのところで、実はマラソンを走っている人がアートではなく、それをネタにしていうか、それをきっかけにして集まっている人の中で発生するコミュニケーションそのものがアートであるという、そういう捉え方だと全く発想が逆転しているわけです。

例えばこれから先、東京のような都市、あるいは別に東京でなくてもいいのですが、そういうことができるとしたら、あるいはやろうとしたときに何か制約になるようなことがあるらうとお考えになったことはありますか。今愛知でやっておられることにはたぶん同じようなことが起こっているのではないかと思います、その辺はどうでしょうか。

鷺田 いろいろな機能、役割をあらかじめ詰め込みすぎることが制約につながると思います。原田さんの益子の作品は、まちの人が関われる余白がある。青木淳さんのいう「原っぱ」のようなどころかもしれません。しかも、誰もがケアしない空間にするのではなく、大事にしますよ、気にかけていますよというメッセージが、原田さんの建物の場合は素材や山と呼応する形によって伝わっています。それが空間をまちの人たちが使って、そこでものをつくることを後押ししていると思います。その両方が大事だと思います。

宮城 平賀さん、例えば南池袋公園ですが、別にそこに限る必要はないと思いますが、いまお話しされた、あそこの空間というのはそういう意味ではかなり自由度が高いですね。原っぱに近いような状態になっていると思います。

例えば平賀さんが鷺田さんにそこで何かアートのものというか、先ほどのひっくり返したアートですが、可能性があるとしたら、例えばどういうことを頼んでみたいとか、何か考えがありますか。すでにいろいろなイベントがされていることはよく知っていますが。平賀 そうですね、おじいちゃん、おばあちゃんに来てほしいですね。

鷺田 おじいちゃん、おばあちゃん、うちの周りにはいっぱいいますよ(笑)。

平賀 いやいや、地域の方々です。今ちょっと若者向けのおしゃれな場所になりすぎてしまった気がして。南池袋公園の運営組織にも地元の町会長さんが入ってくれていますが、その方がおっしゃるのです、お年寄り子どもたちが芝生の上で対話できるような場所をしたいと。そうすれば、もっとまち全体が豊かになっていくのではないかと思います。

鷺田 集まろうと思って椅子をしつらえるとちょっと窮屈だと思います。最初に宮城さんが、「しつらえ」について説明されたとき、「誰かのためにするものがしつらえだ」とおっしゃっている。マラソンのときにできているカウンターのしつらえは、自分たちが集まるために並べた椅子ではなく、走る人にお菓子をあげようという、誰かのためにつくられ

たしつらえです。でも、そのしつらえによってコミュニケーションが生まれる場ができています。丸く閉じていない。外に向かって開かれているコミュニティができて上がっています。そういう意味で誰かのために」というのは重要なキーワードだと思います。

宮城 原田さん、例えば益子の道の駅でなくてもいいのですが、開業して2年ですね。どうでしょうか、そういった動きは。だんだん使いこなすという意味でいくと、地元の人たちはどういうふうに。

原田 すごく使い倒して行って。田舎なので6時に閉まってしまうのですよ。だから夜景がすごくきれいです。昼間、町から広域農道を走っていると後ろの山に溶けていて、建物が見えないと地元の陶芸の人たちに言われます。夜になると浮かび上がってすごくいいです。

にぎわいで、一つ話し忘れたのですが、町役場の担当課の女性が道の駅ができたとき、役場を退職され、今道の駅の広報で働いてくださっています。ですから、計画から現在まで関係がなっています。その方に会うたびに夜やらないかと言っていました。そうしたら今年の土祭、3年に一度ですが、ちょうど今年が本祭で、今年、土祭の期間中、道の駅でバーをやりました。

あと道の駅の山の形が何かアイコンになってきてまして、益子のまちのロゴではないですがなってきました、あの形を型どったキッチンカーが町の中で動いています。そういうことはありますし、もっといろいろやっています。自転車もやっていますし。

宮城 とにかく広がっている。それをトータルに考えてローカリティと呼んでいいのかなと思うのですが。

原田 基本的にたくましいですね。

宮城 ローカリティとはたくましいこと。

原田 そのたくましさを信じるというのがすごく大切で、益子はそれでうまくいっています。

宮城 ありがとうございます。時間が押していますが、進士先生、突然で申し訳ないですが、ご感想なりをいただければ、締めとして。ちょっとずるいのですが(笑)。

進士 そんなつもりではなかったのですが、では1~2分。ここは建築家とか、いわゆるプロですね、専門家の集まりで、行政の方はあまりいないのではないかと思います。今の行政、私はいま県立大学と付き合っています。豊島区とは何十年も景観審議会、その前のアメニティ審議会では会長をやっていました。おもしろいです。区議会議員が半分以上いて、今平賀さんが言ったとおりです。

私は景観審議会の会長をやりながら、議員さんたちに景観論をずっとやっていた気分です。最初はアメニティ形成審議会という、景観はビジュアルな側面しかないからアメニティを使ったのですが、結局普及しなかった。法律ができたので変えてしまったのですが。

でも議員さんたちをどう生かすかということ、これは大事ですよ。さっき平賀さんは住民に説明会をやらなければいけないと言ったでしょう。僕は、それは手続きとして考えています。でも平賀さん、最後のほうでいいことを言ったと思う。手続きのつもりでやっただけだけれど、なかなかいいことを言うなど感じてきたでしょう。昔の根津山のなんとかとか。そこまでくみ取る専門家にならなければ駄目だと思います。

専門家は自分のところでプランを考えているものだから、それに合わせるころの材料は拾うけれど、そうでないのは捨ててしまいます。僕は、それは逆だと思う。原田さんも同じことを言っている。鷺田さんもそう。そういう話を皆さんされた。それを丁寧にやって、もう一つは議員であれ、住民であれ、どうやって自分たちのものにしてしまうか、その辺のスキルアップがこれから必要ではないかと思います。

宮城 ありがとうございます。このシンポジウム、何かまとまった方向に収斂させることははなから考えていませんでしたが、今の進士先生のお話を受け、仮にまとめるといえますか、共通する部分を簡単に引き出すとするとやはり人ですね。ローカリティを実践するのはたぶん人だと思いますし、人とそのアクティビティそのものがローカリティだと考え、それはわれわれも含めたすべ

てだと考えたとき、われわれの役割は何かというと、今おっしゃった人を含めたローカリティをプロモートするために何か大きなフレームワークをつくって呈示していくことでしょう。時間というキーワードを進士先生にいただきましたが、それを、地道に時間をかけ、やっていくことだろう。それぞれ方向は違うけれども、それぞれの人たちが何らかの形で関わる形で一つの方向あるいは一つの地域に集中すれば、かなりいいローカリティがひきだせるのではないのでしょうか。

このシンポジウムの中で「ひきだす」は「魅きだす」としています。これは単に機械的に引き出すという意味ではなく、魅せるという意味を込めてこの言葉を使っているわけです。そこには

当然美的な意識も入っていかなければいけないですが、それは単にビジュアルということではなく人間性も含めた、先ほどの進士先生の話だと美人といい女のの違いでいえば、いい女のほうに持っていくことです。そこでは時間もかかるしプロセスも必要だということで、そのために根気を維持しつづけるべきだ、というところで締めたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 宮城さま、平賀さま、原田さま、鷺田さま、本日は本当にありがとうございました。いま一度登壇者の皆さまに大きな拍手を。ありがとうございました。(拍手)

時間の関係で質疑応答がとれませんので、申し訳ありません。この後、交流

会がございます。その時間にて講師の方々にご質問いただければと思います。本日は大変お忙しい中を aaca 景観シンポジウムにお越しいただき、誠にありがとうございました。以上でシンポジウムを終了させていただきます。

aaca30周年記念事業
景観シンポジウム
ローカリティを魅せるしつらえ
～建築、ランドスケープ、アートの所作～

発行 2019年3月31日
発行者 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
www.aacajp.com
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
TEL 03-3457-7998
FAX 03-3457-1598
E-mail info@aacajp.com

この記録誌は、当日収録された音声テープ並びに使用された画像、配付資料から編集されたものです。無断転載を禁じます。
